

## 名詞句の指示とコピュラ文の意味機能

### ~~~~~目 次~~~~~

1. はじめに
  - 1.1. コピュラ文の特殊性
  - 1.2. コピュラ文の分類
    - 1.2.1. Declerck (1983) (1988) の分類
      - 1.2.1.1. predicational sentence 記述文
      - 1.2.1.2. specificational sentence 指定文
      - 1.2.1.3. descriptively identifying sentence 記述的同定文
      - 1.2.1.4. identity statements 同一性文
      - 1.2.1.5. 考 察
    - 1.2.2. 西山 (2003)
      - 1.2.2.1. 措定文
      - 1.2.2.2. 指定文
      - 1.2.2.3. 同定文
      - 1.2.2.4. 同一性文
      - 1.2.2.5. 定義文
      - 1.2.2.6. 提示文
    - 1.2.3. メンタル・スペース理論のコピュラ文の分析
2. 西山によるメンタル・スペース批判
  - 2.1. 変項名詞句と役割名詞句
  - 2.2. 西山のメンタル・スペース批判の再検討
  - 2.3. 倒置指定文の分析と指示のパラドックス
  - 2.4. 名詞句の指示と不透明な文脈
3. 談話モデル理論によるコピュラ文分析
  - 3.1. 談話モデルの概要
  - 3.2. 指定文のパラドックス
  - 3.3. 措定文
  - 3.4. 同定文
  - 3.5. 同一性文
4. おわりに

## 1. はじめに

### 1.1. コピュラ文の特殊性

言語学の扱う構文のなかでも、コピュラ文は特殊な性質を持つことが注目されてきた。ここでコピュラ文とは、次のような形式を持つ文としておく。

(1)コピュラ文「A is B」: A も B も名詞句

- a. John is the private secretary of the president.
- b. Jean est le fiancé de Suzanne. "Jean is Suzanne's fiancé."
- c. 山田太郎は娘の家庭教師だ

狭義のコピュラ文とは「A is B」で A も B も名詞句であるものを言う。しかし、主格補語の B が形容詞や形容詞的振る舞いを見せる名詞句である場合もあり、これを「準コピュラ文」と呼んでおく。

(2)準コピュラ文「A is B」: A は名詞句、B は形容詞または形容詞的句

- a. A cat is four-legged.
- b. Mon père est professeur de latin. "My father is (a) professor of Latin."
- c. あなたの考え方は独特だ

コピュラ文の一般形を「A is B」で表記するとして、素朴に考えればその意味は「A=B」のはずだが、実はそうではない。コピュラ文の意味は数学的な同一性を表わす「A=B」に還元することができない。この点については後に詳しく見る。

また、コピュラ文は「A is B」というひとつの形式で代表させることはできても、決して一様な構文ではなく、以下に挙げる統語的操作の結果が示すように、その意味機能によっていくつかの下位分類が必要なことも、よく知られている。

「A is B」がもし数学的な同一性を表わしているのだとしたら、A と B の順序を逆にして「B is A」としてもよいはずだが、実際はそうではない。コピュラ文として成り立つものもあるが、非文になるものもある。

- (3) a. Mary is a pretty girl. → \*A pretty girl is Mary.
- b. That man is John's brother. → John's brother is that man.
- c. Jean est un professeur expérimenté. "Jean is an experienced teacher."  
→ \*Un professeur expérimenté est Jean. "An experienced teacher is Jean."
- d. Le fiancé de Marie est le consul de France. "Mary's fiancé is the consul of France."  
→ Le consul de France est le fiancé de Marie. "The consul of Fance is Mary's fiancé."
- e. 太郎は学生だ → 学生は太郎だ
- f. 太郎が学生だ → \*学生が太郎だ 1)

また、伝統的によく扱われてきた問題として、コピュラ文「A is B」の主語 A を名詞から代名詞に変えたとき、どのような代名詞になるかというものがある。

- (4) a. i) What is that man ? — {He / \*It} is a doctor.  
ii) Who is the murderer of Smith ? — {It / \*He} is Roger Brown.
- b. i) Que fait votre père ? — {Il est / \*C'est un} professeur de latin.  
"What does your father do? — {He is / \*It is } a professor of Latin."  
ii) Qui est l'homme qu'on vient de croiser ? — {C'est / \*Il est} mon professeur de piano.  
"Who is the man we've just passed? — {It is / \*He is} my professor of piano."
- c. i) あの人は誰ですか? — {彼 / \*それ} は洋子の従兄弟です。  
ii) あなたの一番の親友は誰ですか? — {それ / \*彼} は島崎君です。

英語の例 (4) a. を見ると、i) では he が、ii) では it が選択されており、これを入れ替えることはできない。フランス語でもほぼ同じことが観察され、b. i)では人称代名詞系列の il が、b. ii) では指示代名詞系列の ce が選択されている。日本語の例 c) でも i)では「彼」 ii)では「それ」で、平行的であることがわかるだろう。ちなみに、英語とフランス語が違う振る舞いを見せるのは b. ii) の例で、フランス語では指示代名詞の ce が選択されるが、英語では人称代名詞の he が適格で it は容認されない<sup>2)</sup>。この問題については既に考察したことがあるので、本稿では詳しくは触れないことにする。

上の (4) のテストは、コピュラ文「A is B」の主語 A に相当する名詞句の意味論的性格の多様性示していたが、主格補語相当の名詞句 B にも同じことが言える。次のテストを見ていただきたい。

- (5) i) John is a friend of mine, {which /\*who} you are not.  
ii) The bank robber is John Thomas, {who /\*which} lives in the house next to ours.

英語の例 a. で主格補語を先行詞とする関係代名詞は、i) では which で ii) では who であり、これは入れ替え不可能である。このことは、i) の a friend of mine と ii) の John Thomas は、同じ主格補語の名詞句でありながら、コピュラ文における意味的機能において異なる性質を持っていることを示している。

似たような事実はフランス語にも観察される。

- (6) a. i) Jean est un professeur expérimenté. "Jean is an experimented professor."  
ii) Jean est ça : un professeur expérimenté. "Jean is that : an experimented professor."
- b. i) Le coupable est Jean Martin. "The culprit is Jean Martin."  
ii) \*Le coupable est ça : Jean Martin. "The culprit is that : Jean Martin."

(6) a. では英語の主格補語に相当する属詞名詞句 *un professeur expérimenté* は、後方照応的働きをする指示代名詞 *ça* で置き換えることができる。しかし、同じ操作は (6) b. の *Jean Martin* には適用できない。

日本語についてコピュラ文の問題を考えると、やや特殊な点としてメタ形式「～トイウ」の問題がある。次の例 (7) a. b. では「～トイウ」を付加することはできないが、(7) c. のみは付加することができ、しかもそれほぼ義務的である。(7) c. の答えとして、「山田は去年三島由紀夫賞を受賞した作家だよ」は容認度が下がると感じる人が多い。

- (7) a. i) 山田は背が高い  
ii) \* 山田というのは背が高い
- b. i) 犯人は洋子だ  
ii) \* 犯人というのは洋子だ
- c. 「山田 ? 山田って誰 ?」「山田というのは、去年三島由紀夫賞を受賞した作家だよ」

以上からもわかるように、コピュラ文「A is B」は意味的に一様な構文ではなく、異なる統語的・意味論的性質を示すいくつかのタイプに下位分類される。

## 1.2. コピュラ文の分類

英語のコピュラ文について Declerck (1983) 3), Declerck (1988) 4) の提案した分類と、日本語のコピュラ文について西山 (2003) 5) が提案した分類を、考察の出発点としたい。

### 1.2.1. Declerck (1983) (1988) の分類

#### 1.2.1.1. predicational sentence 記述文

意味特性 : A について、B で性質・役割・所属などを叙述する

ex. John is a teacher.

John is the cleverest student of them all.

predicational sentence の特徴

a. B は指示的 (referential) ではなく、外延世界のなかの個体を指示しない。

Carter is a politician. I'm glad I'm not him. [him = Carter]

b. A は指示的であり、外延世界のなかの個体を指示する。

c. "A is what ?", "A is how ?" に対する答えとなり、"What A is ..." と擬似分裂文で言い換えられる。

i) What is John ? — He is a doctor.

ii) What my friend is is a teacher.

iii) How is your mother ? — She's fine, thanks.

d. A と B は入れ替えることができない。

i) John is a teacher.

ii) \*A teacher is John.

e. B は文頭に前置できる。

King of the country as he is, he should tell us what to do.

f. B は比較することができる。

John is a better teacher than you.

g. A が人の場合、代名詞は he /she になる。

What is John ? — {He /\*It} is a doctor.

e. B はアスペクト的变化の対象となる。

i) John became a teacher.

ii) John is no more a teacher.

f. even B が可能。

John is even a good teacher.

上に挙げた記述文の特徴のうち、b. で述べられた「A は指示的で、外延世界の個体を指示する」という項目については、A whale is a mammal. のような総称文において、総称的名詞句 a whale が果たして外延世界の個体を指示するのかという問題については、大いに疑問があるが、ここでは深くは立ち入らない。

#### 1.2.1.2. specificational sentence 指定文

意味特性：A は変項 (variable) を表わし、B は変項に対して値を指定する。

The bank robber is John Thomas.

The only man that can help us is the President himself.

specificational sentence の特徴

a. A は変項で weakly referential である。

b. "Who / Which (one) is A ?" の答えになる。

i) Who is the bank robber ? — It is John Thomas.

ii) Which one is your car ? — It's the red one.

c. A と B とは入れ替えることができる。

i) The bank robber is John Thomas.

ii) John Thomas is the bank robber.

d. The following is A : B. " と言い換えることができる。

i) The bank robber is John Thomas.

ii) The following is the bank robber : John Thomas.

e. B はアスペクト的变化の対象とならない。

i) \*The bank robber became John.

ii) \*The bank robber is no more John.

f. even B はできない。

\*The bank robber is even John.

g. 主語が代名詞 *it* のとき、*it* が指すものは漠然としていることもある。

John seems to be moody. — Yes, I think it's his stomach again.

上の a. における *weakly referential* は Declerck 自身もきちんと定義していない曖昧な概念である。後に述べるように、メンタル・スペース理論においてこれは「役割解釈の名詞句」と呼ばれており、西山の用語では「変項名詞句」と呼ばれているものである。この概念については後述する。また、Declerck は複数のスペースが関与するようなコピュラ文について考察しておらず、コピュラ文の主語 A が Declerck の言うように *weakly referential* でない例をうまく扱えていない。

(8)[写真を見ながら] Which one are you ? — I'm this one.

この例で *I'm this one.* は指定文であり、主語の *I* は直示的代名詞なので *weakly referential* と言うことはできない。

### 1.2.1.3. *descriptively identifying sentence* 記述的同定文

意味特性：指示対象の既に確立している A について、記述を述べることで指示対象の同定を行なう

Mike ? Who's Mike ? — Mike is my neighbour.

Who's that man ? — That man is John's nephew.

Who are you ? — I'm the president of this club.

#### D-identifying sentence の特徴

a. A の指示対象の同定は一応済んでいる。D-identifying sentence は、A について追加的情報を付与することで、さらに同定をうながす。

b. "A is who ?" に対する答えとなる。

c. A は *this / that* で置き換えることができる。

i) The murderer is John Smith. (Specificational)

ii) Who's {John Smith / that } ?

iii) That is a farmer from Kent. (D-identifying)

d. A と B は入れ替えることができない。

i) Mike is my neighbour. (D-identifying)

ii) \*My neighbour is Mike.

e. "The following is A : B" で言い換えることができない。

i) That man is a friend of mine.

ii) \*The following is that man : a friend of mine.

Declerck の分類のなかでこの記述的同定文が最も問題が多いと思われる。コンピュータ文「A is B」において、主語 A の位置に Mike のような固有名、that man のような直示的名詞句が来たとき、固有名や直示の意味的性質から言って、その指示は確立していると言わざるを得ない。にもかかわらず、記述 B によってさらに同定するというのはどういうことか。この問題を解決するには、後に述べるように話し手と聞き手の心的スペースを導入しなくてはならない。

#### 1.2.1.4. identity statements 同一性文

意味特性 : A と B とが同一人物 (同一個体) であることを述べる。

The Morning Star is the Evening Star.

Dr. Jekyll is Mr. Hyde.

The man who killed Smith is the man who robbed the bank.

identity statements の特徴

- a. A も B も strongly referential である。
- b. A と B は入れ替えることができる。
  - i) Dr. Jekyll is Mr. Hyde.
  - ii) Mr. Hyde is Dr. Jekyll.
- c. アクセント核はコンピュータに落ちる

Declerck (1988) が指摘しているように、同一性文はしばしば他のタイプのコンピュータ文とのあいだで曖昧性が見られる。例えば "The following is A : B" は、指定文でのみ可能な言い換えであったが、この言い換えは同一性文でも可能であり、この特徴は両者に共有されている。

#### (9) a. Smith's murderer is John Brown. (指定文)

→ The following (person) is Smith's murderer : John Brown.

#### b. The man who killed Smith is the man who robbed the bank. (同一性文)

→ The following (person) killed Smith : the man who robbed the bank.

しかし、Declerck によれば指定文と同一性文の大きなちがいは、指定文では A が weakly referential で B が値を指定するのにたいして、同一性文では A も B も strongly referential であるという点にある。このため、指定文は Who / Which one is A? の答えになるが、同一性文はならない。

#### (10) a. {Who / Which one} is the captain of this ship ?

— The captain of this ship is {me / John / the man over there}. (指定文)

#### b. {Who / Which one} is Dr. Jekyll ?

— ??Dr. Jekyll is Mr. Hyde. (同一性文)

(10) b. で Who is Dr. Jekyll ? は通常は同定文の答を求める質問であり、Which one is Dr. Jekyll ? は指定文の答を求める質問である。同定文の答を求める質問というものが、そもそも想像しがたい。これは日本語で作例してみればよくわかる。

- (11) A: ジキル博士というのは {誰ですか / 誰のことですか}  
B1: ジキル博士というのはハイド氏です  
B2: ジキル博士というのはハイド氏のことです  
B3: ジキル博士はハイド氏です

質問 A は同定文の答を求める質問である。B1 と B2 の自然な解釈は、「あなたがその正体をたずねているジキル博士という謎の人物は、実はあなたもよく知っているハイド氏のことです」というものであり、これは記述的同定文に極めて近い。ここで「極めて近い」と歯切れが悪いのは、記述的同定文ではふつう B は記述が与えるのだが、ここでは「ハイド氏」という固有名になっているからである。固有名は記述ではなく、値名詞句として機能する。

答え B3 の自然な解釈は「あなたもよく知っているジキル博士は、実はあなたの知っているハイド氏と同一人物だ」という同一性文であり、これは質問 A が想定する話し手の知識状態とは食い違っている。だから同一性文を答として導く質問は、考えることが難しい。これは当たり前とも言える。同一性文はふたつの値が同一であることを述べる文だから、そのふたつの値が別のものだと誤解している人の誤謬を正すことになる。だから、同一性文は質問に対する答としてではなく、いきなり使われる方が語用論的に適切だと言える。同一性文以外の他のコピュラ文はすべて、その文を導く質問を自然に想定することができる。この点において、同一性文は特殊なのである。

#### 1.2.1.5. 考 察

Declerck の 4 つのコピュラ文タイプが出そろったところで、さらに考察を進めてみよう。コピュラ文「A is B」は、4 つのタイプで表面上は同一の文形式なので、意味的基準以外では区別することが難しい場合がある。しかし、次のような統語的ちがいがあることが知られている。

まず指定文と記述的同定文は、英語では埋め込み疑問文で語順のちがいがあがある。

- (12) a. I don't know who is the captain. [指定文]  
b. I don't know who the captain is. [記述的同定文]

また指定文では、B に現われた再帰代名詞は A の構成素と同一指示解釈ができる。

- (13) a. The job Fred has accepted is to write a book about {himself /\*him} [指定文]



b. The job Fred has accepted is a source of agony for him. [記述文]

また逆行代名詞化についても次のちがいがあることが知られている 6)。記述文では A に含まれた代名詞は B の一部を先行詞とする逆行代名詞化が可能だが、指定文ではこれが阻害される 7)。

(14) a. Ses yeux verts sont les seuls avantages de Christine. [記述文]

b. \*Ses seuls avantages sont les yeux verts de Christine. [指定文]

これはフランス語の例だが、英語に直してみても同じ現象が観察されることがわかる。

(15) a. Her green eyes are the only charm of Christine. [記述文]

b. \*Her only charm is Christine's green eyes. [指定文]

また日本語ではメタ形式「～トイウノハ」「～ッテ」の使用に関して次のちがいを観察することができる。記述的同定文ではメタ形式の使用が義務的で、他のタイプでは逆に容認されないという、極めてシャープな対立がある。

(16) a. 記述文 {花子は / \*花子というのは} 背が高い 8)

b. 指定文 {この班の班長は / \*この班の班長というのは} 山田だ

c. 記述的同定文 山田? 山田って誰?

{\*山田は / 山田というのは} 昨日私の試験でカンニングした学生だ

d. 同一性文

{ジキルは / ??ジキルというのは} ハイドだ 9)

Declerck (1983) のそもそもの目的は、コピュラ文の主語の it / he の使い分けの解明にあったのだが、彼の結論は次のようにまとめられる。

(17) a. 記述文の主語には he を用いる。

What do you know about John? — {He /\*It} is kind and warmhearted.

b. 指定文の主語には it を用いる。

Who is the captain of this ship? — {It /\*He} is me.

c. 記述的同定文の主語には、he が通常用いられるが、that やその弱化した形式として it を用いることもある。

i) The man over there, who is he? — He is the son of the prime minister.

ii) There's a policement at the door. — Who is {it / he}?

iii) The police have arrested a suspect. — I know. {It /\*He} is John!

iv) The police arrested a suspect. He is Mr. Green, aged 46, of Walney Street, Harrow.

d. 同一性文の主語には *he* を用いる。

この結論を見ると奇妙なことに気づくだろう。a. b. d. では用いることのできる主語代名詞が一義的に決まるが、c. の記述的同定文だけは *he / it / that* とさまざまな代名詞を用いることができる。この観察からわかるのは、「記述的同定文」というコピュラ文のタイプが極めて微妙なものであり、場合によってはいくつかのサブタイプに分かれるということだろう。事実、この「記述的同定文」はコピュラ文研究の「躓きの石」であり、後述するように話し手と聞き手の「知識状態」という語用論的要因を組み込まなければ十分には解決することができない。この点については後に触れる。

### 1.2.2. 西山 (2003) 10)

西山 (2003) はこれまで西山が行なってきたコピュラ文研究のいわば集大成と言える。ここでは主として西山 (2003) のみに拠って論じることにする。まず西山の掲げるコピュラ文の分類を見てみよう

- |      |                          |                    |
|------|--------------------------|--------------------|
| (18) | 「A は B だ」                | 「B が A だ」          |
| a.   | 措定文                      | 《なし》               |
| b.   | 倒置指定文                    | 指定文                |
|      | 「幹事は田中だ」                 | 「田中が幹事だ」           |
| c.   | 倒置同定文                    | 同定文                |
|      | 「こいつは山田村長の次男だ」           | 「山田村長の次男がこいつだ」     |
| d.   | 倒置同一性文                   | 同一性文               |
|      | 「ジキル博士はハイド氏だ」            | 「ハイド氏がジキル博士だ」      |
| e.   | 定義文                      | 《なし》               |
|      | 「眼科医(と)は目のお医者さん<br>のことだ」 |                    |
| f.   | 《なし》                     | 提示文                |
|      |                          | 「特におすすめなのがこのワインです」 |

以下、それぞれの意味特徴を見て行くことにする。

#### 1.2.2.1. 措定文

西山のいう措定文は、Declerck の *predicational* に相当する。措定文の意味特性は、「A で指示される指示対象について、B で表示する属性を帰す」とされる。次が実例である。

- (19) a. 五嶋みどりはヴァイオリニストだ。  
b. モーツァルトは天才だ。  
c. 鯨は哺乳動物だ。

また西山は、措定文の特徴として次の4点をあげている。

- (20) a. A は指示的名詞句、B は叙述名詞句〔非指示的〕である。  
b. B は連言の「で」で結ぶことができるが、「と」で結ぶことはできない。  
c. A と B は、意味を変えずに逆転することはできない。  
d. B は形容詞・形容動詞のこともある。

このうち、b. と c. を示すのが次の例である。

- (21) a. ? パデレフスキーは、政治家とピアニストだ。  
b. パデレフスキーは、政治家でピアニストだ。  
c. ? 洋子は、金持ちと天才だ。  
d. 洋子は、金持ちで天才だ。

- (22) a. 五嶋みどりはヴァイオリニストだ。〔措定文〕  
b. ヴァイオリニストは五嶋みどりだ。〔倒置指定文または倒置同定文〕  
c. ヴァイオリニストが五嶋みどりだ。〔指定文〕

ここで西山の言う「指示的名詞句」「非指示的名詞句」「叙述的名詞句」の定義を確認しておこう。この点は以下の議論において非常に重要なポイントになるので、少し詳しく検討する。

まず西山は名詞句を次のように分類している。まず、名詞句は「指示的名詞句」と「非指示的名詞句」とに分かれる。次に、「非指示的名詞句」は、「叙述名詞句」と「変項名詞句」にさらに分かれる。

- (23) 西山の名詞句の分類  
a. 指示的名詞句  
b. 非指示的名詞句  
b-1. 叙述名詞句  
b-2. 変項名詞句

指示的名詞句について西山は、「指示的名詞句は世界のなかの対象（個体）をさす」と述べている。重要なのは西山がこれに付け加えている但し書きの方である。次の4点がある。

- (24) a. ある名詞句が指示的であるかどうかは、その名詞句が文中で述語との関係で果たす意味機能によって決まり、名詞句だけで独立して決まるものではない。
- i) 洋子の好きな作曲家は病気だ。〔指示的〕
  - ii) あの人、洋子の好きな作曲家だ。〔非指示的〕
- b. 「指示的」「非指示的」というのは、意味論上の概念であり、語用論上の概念ではない。
- c. 名詞句が指示的であることと、その指示対象がいかんして決定されるかということは、別の問題である。指示的であるからといって、その対象を知っている必要はないし、またその対象を確定できる必要もない。
- d. 指示的であるからといって、その指示対象が現実世界に存在する必要はない。
- ex. 浦島太郎は竜宮城に着きました。

a. については特に詳しく論じる必要はない。ただし、「私」「君」のような意味論で言う「指標詞」(indexical) や「この本」のような直示表現は、単一スペース内で考える限りは常に指示的名詞句として働く。後に詳しく論じるが、「(写真を見て指さしながら) 私はこれです」のように、「私」が西山のいう変項名詞句として、つまり非指示的名詞句として働いているように見えるのは、複数のスペースをコネクタで結ぶ「間スペース的コピュラ文」の場合に限定される。

次の b. はおおいに問題がある。西山のこのような宣言は、西山 (2003) を一貫して貫いている次のような理論的立場に起因する。

「本書では意味論と語用論のレベルをはっきり区別するという立場を一貫してとっている。つまり、意味論と語用論はそもそもまったく別の理論装置だと仮定したうえで、まず名詞句の言語的意味の問題を十分考察し、ついで、そのような名詞句の具体的な使用における解釈の問題を語用論的装置によって捉える、という二段構えのアプローチをとるのである。」(西山 2003 : i)

これに対して、筆者はまったく逆の立場を採る。筆者の提唱する「談話モデル」は、Fauconnier のメンタル・スペース理論と同じく、意味論と語用論とを区別しない理論装置であり、コピュラ文の意味解釈はこのような装置を用いてしか解明することはできないと考えている。特に Declerck が *descriptively identifying sentence* 「記述的同定文」と呼んだタイプのコピュラ文は、話し手と聞き手の「知識状態」に言及せねばならないが、「知識状態」とはまさに語用論的概念であり、これを抜きにしては「記述的同定文」の意味特性を明らかにすることはできない。この点については、後に詳しく論じる。

c. もまた同じ問題に関わりがある。「指示的である」ということと、「その指示対象を同定できる (知っている)」ということとを別だと見なすのは、b. でも述べられているように、「指

示的 / 非指示的」は意味論的区別であり、「対象をどのような経路で同定できるか」は語用論的問題だと考えられているからである。

これは実にやっかいな問題であり、「指示とは何か」という本質的議論を抜きにしては解決できない。この問題を論じるには優に一冊の本を書く必要があり、ここでは証明抜きに次の点のみを示唆しておくに留める。

「指示的である」ことと、「その指示対象を同定できる（知っている）」ということを別だとする根拠としては、次のような例がよくあげられる。

(25) a. the center of the Earth

b. 世界で一番背の高い人

c. 13 から数えて 101 番目の素数

d. A dog has been rummaging in the garbage can. It has torn open all the plastic bags. 11)

a. では地球が球である限り、それがどこかは知らなくても地球の中心はひとつに決まる。だからそれがどこかを知らなくても、あるいは知ることができなくても、the center of the Earth はある特定の一点を指す「指示的名詞句」だという考え方である。同じことは、b. c. についても言える。d. は荒らされたゴミ箱を見ての発話である。このとき、荒らした犬を見たわけではなく、知っているわけでもないの、a dog の指示対象を同定することはできない。しかしこの a dog は現実モードにおける特定解釈であり、指示的であると考えざるをえない。

本稿では「指示的である」という意味特性の源泉として、次のふたつのケースがあると想定する。

「指示的」という意味特性の源泉

a. その指示対象を知っているか、適切な手続きを踏むことで同定できる。

b. 現実モードで叙述された出来事の参与者として、特定の時空間に定位される。

a. は西山が意味論と語用論を峻別すべきとして排除した源泉である。これを採用することは、「指示的」とは談話的に相対的概念であり、「話し手にとって指示的」と「聞き手にとって指示的」とを区別することにつながる。これについては後に論じる。

b. は A dog came in. のような出来事文の参与者として a dog が過去の出来事内に定位されることで指示的となるケースである。出来事による定位については、東郷 (2002) 12) を参照のこと。この場合、話し手にとっても聞き手にとっても、a dog の指示対象を知っている必要もなければ、何らかの経路で同定できる必要もない。一般に語りの文脈で登場する指示的名詞句はすべてこのタイプである。次例の「おじいさん」「おばあさん」がこれに当たる。

(26) 昔々、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。

西山の (24) d. については何も問題はない。

さて、次は「非指示的名詞句」に移る。西山によれば、非指示的名詞句には「叙述名詞句」と「変項名詞句」とがあるとされている。まず「叙述名詞句」の定義は次のようなものである。

(27) 叙述名詞句 (西山)

コピュラ文の述語位置に現われる名詞句〔述語名詞句〕のうち、主語名詞句の指示対象の性質・属性を表わす名詞句

叙述名詞句になれる名詞句には、次のような制約があるとされている。

(28) (措定文「AはBだ」の) Bは叙述名詞句なので、「僕」「彼」のような人称代名詞、「あいつ」「この車」のような直示的要素、「お互い」「自分」のような照応形、「三匹の子豚」「多くの本」などの数量詞を含む表現は、Bの位置に来ることができない。

(西山 2003 : 125)

次がその例である。a. b. c. は措定文の解釈にはならず、いずれも指定文になる。また d. はやや容認度が下がるとされている (13)。

(29) a. 悪いのは僕だ。〔倒置指定文〕

b. 犯人はあいつだ。〔倒置指定文〕

c. 万引きして捕まったら、悪いのは自分だ。〔倒置指定文〕

d. ?隣の住人は三匹の子豚だ。

ただし、固有名詞は叙述名詞句になることができるとされている。この場合「田中太郎」という固有名は、世界の中の存在を指す指示表現ではなく、「田中太郎という名前である」という属性表現と解釈される。

(30) あの人は田中太郎です。

= あの人は、「田中太郎」という名前を有するという属性を持っている。

後に述べるが、固有名が述語名詞句位置に立つとき、措定文の解釈になることもあれば、倒置同定文の解釈になることもある。次の(31) a. が何の予備知識も語用論的前提もなく紹介の場面で発せられたら、「こちらは田中さんという人です」という意味であり、措定文である。しかし、(31) b.で「あの人は誰ですか?」という同定を求める質問の答えとして発せられたときには、倒置同定文である。

- (31) a. [紹介して] こちらは田中さんです。[指定文]  
 b. 「あの人は誰ですか?」「あの人は田中さんです」[倒置同定文]

西山の分類による「非指示的名詞句」のもうひとつのタイプである「変項名詞句」は次節で考察する。

#### 1.2.2.2. 指定文

指定文は「B が A だ」で、順序を逆転した「A は B だ」は倒置指定文と呼ばれている (14)。倒置指定文「A は B だ」には、次のような意味特性が与えられている。(32) がその例である。

倒置指定文の意味特性

「変項名詞句 A に対して、B で値を付与する。」

- (32) a. 花子殺しの犯人はあの男だ。  
 b. 洋子の好きな作曲家はバッハとブラームスだ。  
 c. 太郎について気になる点は、彼の話し方だ。  
 d. 賢いのは、太郎だ。

西山によれば、倒置指定文には次の特徴があるとされる。c. は Declerck の *specificational sentence* の特徴と同じであり、d. は指定文と倒置指定文の変換に関するものである。

- (33) a. A は非指示的で、変項名詞句である。  
 b. A が人であっても、「彼」で受けることはできず「それ」で受ける。人称代名詞や直示的要素は変項名詞句と両立しない。  
 c. 「誰が / どれが…であるか」にたいする答えとなる。  
 d. 「A は B だ」は意味を変えずに「B が A だ」 [= 指定文] に言い換えることができる。

さて、上に列挙した特徴のうち、最も重要なのは a. の「変項名詞句」である。西山は変項名詞句について、次のような定義を与えている。

- (34) 「(32a) 『洋子の指導教授はあのひとだ』は「[x が洋子の指導教授である] を満たす x の値はあのひとだ」を言わんとしている文であると思われる。倒置指定文「A は B だ」の A が指示的でないという理由は、A が「x が洋子の指導教授である」という命題関数を示していることにある。このような名詞句 A を筆者は「変項名詞句」と呼ぶ。変項名詞句は論理的には 1 項述語であるといつてさしつかえない。」(西山 2003 : 76)

上の (33) b. で述べられているように、変項名詞句はたとえ人をさしていても「彼」で受けることができない。その理由は変更名詞句がまさに指示的ではないからだと考えられる。

- (35) a. 花子殺しの犯人、それはあの男だ。  
b. ? 花子殺しの犯人、彼はあの男だ。

また「A は B だ」で変項名詞句に値を付与するとされる B だが、指示的名詞句が多いものの、必ずしも指示的でなくてはならないということはない。次例の下線部 B は指示的ではないが、文は倒置指定文である。

- (36) a. この種の実験で一番大切なことは、その実験室の温度だ。  
b. 国民の最大の関心事は、誰が次の首相になるかだ。

西山の「変項名詞句」という概念のはらむ問題点については、後に詳しく論じる。

### 1.2.2.3. 同定文

同定文の意味特性は、次のように規定されている。(37)が実例である。

倒置同定文「A は B だ」の意味特性

A は B という特徴記述を満たす「もの / 人」であると述べることで、A の指示対象を他から識別して認定する。

- (37) a. 本書は、涙なしにドイツ語をマスターできるものです。  
b. あの男は、社長の片腕として信任の厚いひとだ。  
c. こいつは山田村長の次男だ。

倒置同定文の特徴として、西山は次の2点をあげている。

- (38) a. A は指示的名詞句である。B は記述内容が重要な指示的名詞句である。  
b. A が人のとき、「彼」で受けることができる。

さて、特徴 a. の「記述内容が重要な指示的名詞句」とは何だろうか。これについて西山が述べていることを検討してみよう。

- (39) 同定文「B が A だ」のように、B が「が」をとることができることから明らかなように、B は指示的名詞句である。ただ (137) [= 山田さんは、何でも反対するひとだ] (138) [= 何でも反対するひとが、山田さんだ] における「何でも反対する (ひと)」は、



指示的とはいっても、この表現でもって具体的にどのひとを指すかを問うことはナンセンスであろう。(倒置)同定文の B は、世界のなかの一次的な個体(人間や家、物)を直接指示しているのではない。そうではなくて、B は、A を同定するための特徴記述を満たすものを指示するのである。B の記述内容が決定的であるのはそのためである。(中略)その意味で、(倒置)同定文の B は、同一対象を指示する別の表現で置き換えることのできない特殊な種類の指示表現であると言わざるを得ない」(西山 2003:170) 15)

まず、「が」を取ることは指示的である証明にはならないことに注意したい。次の例は指定文だが、「が」を取っている下線部の主語「温度」「アメリカの動向」は指示的ではない。

- (40) a. 温度がこの実験の鍵だ。  
b. アメリカの動向が一番の問題だ。

次に「指示的ではあるが世界のなかの一次的個体を直接指示しない」指示的名詞句とはいかなるものだろうか。これは理解しがたい概念であると言わざるを得ない。

そもそも同定文とは、同定を求めるような質問の答えとして考えるのが、いちばんその特性を理解しやすい。Declerck は一貫してこのような態度を採っているが、西山はそうではない。西山があくまでコンピュータ文を単独で分析理解しようとしているのは、既に述べた意味論と語用論を峻別するという方針から来ているものと思われる。このため、西山が挙げる同定文の例文は、「何でも反対する人が山田さんだ」のようにどこか奇妙なもので、同定文の典型とは言えないものが多い。

同定文の典型は次のような文である。

- (41) A: あの人是谁ですか。  
B: あの方は息子のピアノの先生です。  
(42) A: これは何ですか。  
B: これは我が社が今度発売する新型パソコンです。  
(43) A: この黒い箱は何ですか。  
B: それは時限爆弾の起爆装置だ。

もし西山の言うように、倒置同定文「あの方は息子のピアノの先生です」において、A の「あの人」も B の「息子のピアノの先生」も指示的であるとしたら、この文には指示される対象がふたつあり、そのふたつは同一であるという意味になってしまうが、これは明らかにおかしい。それでは Declerck の言う同一性文「ジキルはハイドだ」と区別がつかなくなってしまう。倒置同定文「あの方は息子のピアノの先生です」において、指示的なのは「あの人」だけであり、「息子のピアノの先生」は同定に足るだけの示差的特徴づけをする非指示的名詞句に過ぎない。

同定文においては、人と物の非対称性が顕著であることにも注意すべきだろう。(42) (43) のような物の場合には、「正体のわからない物」(=A)が、何らかのクラス (=B) の一員であることを述べれば、同定は完了したものとみなされる。B は Fraurud (1996) 16) のいう instances 「クラスの一員」としての存在様態であり、物の同定はこの最も低い存在レベルの情報で完了する。

一方、人が話題になっている時は、次のように instances で答えるとおかしい。大勢の人の集まるパーティーの場面での発話だとする。

(44) A: あの人は誰ですか。

B: \*人間です / \* 男です / ??学生です / ??音楽家です / 刑事です

人の場合、instances は「同定に足るだけの示差的特徴づけ」を含まないからである。最後の「刑事」のみ同定が成功したと見なされるのは、刑事と出会うのは犯罪の現場かその捜査段階においてであり、「刑事である」ということはパーティーの場面では、そこに犯罪が絡んでいることを示唆するため重大な情報となるからである。

人の場合は通常 instances ではなく、functionals 「関数的存在」で同定情報を与えることが多い。上の (41) の「息子のピアノの先生」がそれである。ここには実は「私の」→「息子の」→「ピアノの先生」という二重の関数関係があるが、ここでは「息子の」→「ピアノの先生」だけに注目すると、「息子」という話し手との関係で同定される存在を起点とし、「そのピアノの先生」という関係概念を同定情報として提供している。ふつうの状況ではこれで同定は完了したと見なされ、それ以上に「何という名前か」「独身か結婚しているか」「どこに住んでいるのか」といった個体情報は余剰とされる。

さて、(39)の西山の文章についての検討を続けると、「(倒置) 同定文の B は、同一対象を指示する別の表現で置き換えることのできない特殊な種類の指示表現である」という部分も問題がある。

一般に指示表現にはライブニッツの法則が成り立つと言われている。「ライブニッツの法則」とは、「指示対象が同一であれば、指示表現  $\alpha$  を指示表現  $\beta$  で置き換えても文の真理値は変わらない」というものである (17)。次例では「小泉純一郎」と「首相」は指示対象が同一であり、2005年1月時点においてその真偽値は同一である。

(45) a. 小泉純一郎は靖国神社に参拝した。

b. 首相は靖国神社に参拝した。

西山は「同定文の B は、同一対象を指示する別の表現で置き換えることができない」と言っているのだから、そのまま額面通り受け取れば、ライブニッツの法則が成り立たない特殊な指示的名詞句だと述べていることになる。これは指示理論にとって看過できない重大な問題である。西山の言わんとするところを筆者なりに忖度すると、次のようなことだと推測

される。次例をもとに見てみよう。

- (46) A1: あの男は誰ですか。  
B1: あの男は耕助だよ。  
A2: ン ?  
B2: あの男は山田村長の次男だよ。  
A3: ああ、そうなんですか。だから寄り合いを取り仕切っているんですね。

西山は概略次のようなことを考えているものと推測される。

A1 は同定を求める質問である。B1 の答えで A は同定に成功していない。だから B2 では、改めて固有名に代えて記述を用いている。現実には「耕助」＝「山田村長の次男」だから、B1 と B2 は同じ真理値を持つ。しかし、B1 は同定に成功せず、B2 は成功しているのだから、両者を置き換えることはできず、「山田村長の次男」はその記述内容が決定的に重要な指示的名詞句である。

しかし「耕助」と「山田村長の次男」を置き換えると上の談話が成立しないのは、ライブニッツの法則が成り立たないからではなく、両者が聞き手 A に提供する同定情報の質の差に起因する。かんたんに言えば、A は「耕助」が誰なのかを知らないため、固有名「耕助」は対象の同定に何ら寄与しないが、同一人物を「山田村長の次男」と言い換えれば、A も知っている「山田村長」を起点とした functionals 「関数的存在」として同定できるということである。ここでの重大なポイントは、次のようにまとめることができる。次は今の時点におけるインフォーマルな定式化で、談話モデルを用いたより厳密な定式化は後に提示する。

#### 同定情報と知識状態の原則（インフォーマル版）

固有名が同定に使われるには、聞き手がその固有名が指示する存在を知っていなくてはならない。記述が人の同定に使われるときには、聞き手がその存在を知っている指示対象を起点 (anchor) とする functionals 「関係的存在」であるとき、もっともスムーズに同定が完了する。物の同定はふつう instances 「クラスの一員」レベルの記述で完了する。

つまり固有名による同定の場合には、聞き手が「知っている」ということが、同定操作には決定的に重要だということである。さて、「知っている」とか「知らない」とかという話し手と聞き手の知識状態に関することは、意味論の領域に属するものではなく、語用論の領域に属するものである。従って、上の原則の有効性を認めることは、コピュラ文の分析、少なくともその一タイプである同定文の分析は、意味論の領域だけでは十分に行なうことができず、語用論的考慮を必要とするということを意味する。

倒置同定文は措定文とよく似ていて、どちらと解釈すべきか迷うことがある。しかし西山は次のちがいがあると言う。

- (1) 倒置同定文「AはBだ」は同定文「BがAだ」に書き換えられるが、措定文はできない。
- (2) 倒置同定文は、「Aは何者か」という「Aを他から識別する同定条件に関する情報」を与える。措定文は、「Aはどんなひと（もの）か」という属性に関する情報を与える。

このため倒置同定文のBは、Aの指示対象を他から区別するに足る十分な情報を持っていないとされる。

- (47) A: あのひとはいったい何者か。  
B1: ?? あのひとは背の高い女性です。〔措定文〕  
B2: あのひとは、私の息子のヴァイオリンの先生です。〔倒置同定文〕

西山は「Aを他から識別する同定条件に関する情報」とだけ述べているが、例として挙げられている(47)の場合は、もうひとつ重要なポイントがある。B-1と較べたときのB-2「私の息子のヴァイオリンの先生」の顕著な特徴は、「私」を起点(anchor)とした関数的存在functionalsとして答えているという点である。上の「同定情報と知識状態の原則」でインフォーマルに述べたように、人を対象とする同定操作は関数的存在を表わす記述を用いるとき、最もスムーズに進行する。

- (48) A: あの人は誰ですか。  
B1: (このマンションの) 新しい管理人さんです。  
B2: 所長の愛人だよ。  
B3: これから泊まる旅館の若主人です。

もちろん関数的存在ではない記述による同定も可能である。

- (49) A: あの美人は誰だい。  
B: 何だ、知らないのかい。第一回国民的美少女コンテストでグランプリを取った後藤久美子だよ。
- (50) A: カッシーニって誰？  
B: フランスの天文学者だよ。

(49)では固有名プラス記述によって十分な情報が提供されているので、同定が完了したと

みなす人が多いだろう。しかし(50) では instances 「クラスの一員」レベルの存在記述を用いているので、B の答えによって A が「カッシーニ」の同定が完了したと見なすかどうかは、この談話の目的や発話の状況や A の好奇心などによって決まる。同定とは意味論的概念ではなく語用論的概念なのであるから、A が B の答えに満足しなければ、「その人どんなことをした人?」「いつ頃の人?」のように、追加的情報を求めることになる。

#### 1.2.2.4. 同一性文

倒置同一性文「A は B だ」の意味特性は、次のように規定されている。

倒置同一性文の意味特性

A と B とが同一の指示対象を持つことを述べる文である。

- (51) a. こいつは、昨日公園の入り口でぶつかったあの男だ。  
b. 今朝電車の中で忘れた傘は、私が昨年パリで買った傘だ。  
c. 明けの明星は宵の明星だ。

倒置同一性文には次の特徴がある。

- a. A も B も指示的名詞句である。  
b. A と B は意味を変えずに、「B が A だ」と入れ替えることができる。

同一性文は Declerck の identity statement と同じであり、特に問題はない。

#### 1.2.2.5. 定義文

ここまでは Declerck の分類に正確に対応するが、西山はさらに 2 種類のコピュラ文を認めている。そのひとつが定義文である。定義文の意味特性は次のように規定されている。

定義文の意味特性

A は定義される項で、B によってその定義を示す。

- (52) a. 摂政は、天皇が女性・幼少であるとき、または病気の時などに天皇に代わって政治をとる役（のひと）である。  
b. 「お母さん、眼科医って何?」「眼科医とは目のお医者さんのことよ」

西山は次の定義文の特徴を挙げている。

- (53) a. A は指示的名詞句であるが、世界のなかの一次的個体をさすのではなく、概念(type)をさす。

- b. 強い方向性があり、「AはBだ」に比べて「BがAだ」はあまり自然ではない。
- c. 「AとはBのことである」「AとはBのことをいう」などの形式をとることもある。

定義文はメタ言語的発話であり、意味の不明な用語・概念に関する質問の答えとなる。答えには (52) b. のように、メタ形式「～というのは」「～って」などが用いられるのがふつうである。

定義文という分類を初めて提案したのは砂川 (1995) 18) であるが、砂川は例として次のものをあげている。

- (54) a. 「山田？ 山田って誰のこと？」 「山田っていうのはぼくの後輩だ」  
 b. 「サーターアンダーギーって何？」 「サーターアンダーギーというのは沖縄のお菓子さ」  
 c. 解脱とは煩惱から解放されることだ。

このうち a. は記述的同定文であり、定義文に含めるのは問題がある。砂川 (1995) では記述的同定文という分類項目を立てていないのでこのようになったものと思われる。定義文については、本稿では特に扱わない。

#### 1.2.2.6. 提示文

提示文と呼ばれているのは、次のようなコピュラ文である。

- (55) a. 特におすすめなのがこのメニューです。  
 b. そこに現われたのが、陽子だった。

このタイプのコピュラ文は、今までの分類にはうまく収まらない。それは次の理由による。

- (56) a. 措定文・定義文ではない  
 措定文・定義文は「AはBだ」という形式を取り、例のように「BがAだ」とすることができない。  
 b. 指定文ではない  
 A (= このメニュー) は指示的名詞句であり、変項名詞句ではない。  
 c. 同定文ではない  
 「このメニューというのは何か」という問の答にならない。  
 d. 同一性文ではない  
 「特におすすめなの」は指示的名詞句ではない。

天野 (1995) 19) はこのタイプの文を指定文の変種と見なしているが、西山は反対している。

確かに次の a. の倒置指定文と意味的に類似しているが、西山は次のようなちがいがあると指摘している。

- (57) a. 特におすすめなのは、このメニューです。〔倒置指定文〕  
b. 特におすすめなのがこのメニューです。〔提示文〕

まず倒置指定文の A は「それ」で受けられるが、提示文は受けられない。

- (58) a. 特におすすめなもの、それはこのメニューです。〔倒置指定文〕  
b. ? 特におすすめなもの、それがこのメニューです。〔提示文〕

値を選び出す疑問文を作れない。

- (59) a. 特におすすめなのはいったいどれだ。〔倒置指定文〕  
b. \*特におすすめなのがいったいどれだ。〔提示文〕

また倒置指定文と異なり否定が難しい。

- (60) a. 特におすすめなのはこのメニューではありません。〔倒置指定文〕  
b. ? 特におすすめなのがこのメニューではありません。〔提示文〕

砂川 (1996) 20) はこれを「後項特立文」とし、砂川 (2000) 21) はこれを「全体焦点文」と改めている。新屋 (1994) 22) は「中立叙述文」だとしている。

この提示文というカテゴリーの性格づけと、引用文献に挙げられている例が均一なカテゴリーに分類できるものかどうかという問題は興味深いが、本稿では扱わず別の機会に譲りたい。

### 1.2.3. メンタル・スペース理論によるコピュラ文の分析

コピュラ文をめぐっては、西山とメンタル・スペース論者とのあいだで論争が続いている。その論争には、コピュラ文を考える上で重要なポイントが含まれているので、理解のためにメンタル・スペース理論におけるコピュラ文の取り扱いをかんたんに見ておくことにしよう。この問題を概観するには、次の文献を読むこと。

メンタル・スペース理論においては、名詞句は関数的性質を持ち、役割 (role) と値 (value) を持つとされている。

- (61) 「名詞句は常に同じ対象を指すわけではなく、コンテキストに応じ異なる対象をさせる。例えば *le président* という語を現在アメリカ人が使えば普通はブッシュを指すが、フランス人ならミッテランを指す。しかし 10 年前はこの語はアメリカ人にとってはカ

ーターを、フランス人にとってはジスカール=デスタンを指した。」(坂原 1990a) 23)

役割と値は次のように定義される。

(62) 「役割とは名詞句の意味・記述内容によって与えられる一種の関数で時間、状況、コンテキストなどの変化に応じ、記述を満足する個体の集合から適当な値を選択する。例えば *président* は国名を変域にし、大統領の集合を値域にする役割関数である。役割の変域の要素である時間、状況などは、名詞句がある具体的値を取るためのパラメータと言われる。」(Ibid.)

また、名詞句には役割解釈と値解釈があるとされている。

(63) 「名詞句の指す役割が文の解釈に本質的に関与するとき、その名詞句の解釈を役割解釈と呼ぶ。一方、名詞句が役割を指しながらも、基本的に役割のある特定の値を指すための方便として用いられるとき、その解釈を値解釈と呼ぶ。」(Ibid.)

次がそれぞれの解釈を示す例である。変化述語「変わる」における解釈を特に「値変化の役割解釈」と呼ぶことがある。

(64) このごろ首相がよく変わる。

解釈 1 (値解釈)

「このごろ首相である小泉純一郎の意見(容貌、髪型、etc)がよく変わる」

解釈 2 (役割解釈)

「このごろ首相が宇野から海部へ、海部から森へと頻繁に交代する」

以上の予備知識を踏まえて、メンタル・スペース理論におけるコピュラ文の分類を見て行こう。メンタル・スペース理論においては、基本的に同定文と記述文という二大分類しかない。ただし、ここで「同定文」と呼ばれているのは、Declerck の *specificational sentence*、西山の「倒置指定文」に相当するので、用語に惑わされないよう注意されたい。同じく「記述文」と呼ばれているのは、西山の言う「措定文」のことである(24)。

(65) 同定文「A is B」 【→西山の「倒置指定文」】

首相は小泉純一郎だ

A は役割解釈の非指示的名詞句

B は値を同定する指示的名詞句

(66) 記述文「A is B」 【→西山の「措定文」】



ゴードレーはフランスの詩人だ

A は値を指す指示的名詞句

B は属性を表わす非指示的名詞句

さて、以下では坂原の提案するコピュラ文の分類について、いくつかの問題点を指摘する。

まず第一は、Declerck の *descriptively identifying sentence*、西山の「同定文」を分類する場所がない。「A is B」の A が値変化の役割解釈だと同定文 (=西山の倒置指定文) になり、値解釈だと記述文 (=西山の措定文) になるというのが坂原の基本的立場である。では次の例の c. はどうなるのか。

(67) a. 倒置指定文 (坂原の同定文)

The bank robber is John.

値変化の役割解釈      値解釈

b. 措定文 (坂原の記述文)

The president is bald.

値解釈      非指示的

c. 同定文

A1 : The bank robber is John Smith. (指定文)

B1 : John Smith ? But who is John Smith ? (同定を求める疑問文)

A2 : {John Smith / He} is a farmer from Kent. (同定文)

値解釈      非指示的

以下、西山の用語を使うと、B1 は指定文だから、John Smith は役割に対して付与された値名詞句である。しかし、聞き手 B はその名前に心当たりがないので、B1 の質問で同定を求めている。A2 は従って同定文であり、主語 John Smith は指示的名詞句で、述語 a farmer from Kent は属性を記述する非指示的名詞句である。

坂原はこの点について次のように述べている。

「ここで記述文といわれているものは二つに下位分類するほうがよいのかもしれない。まず、最初のもは単に属性付加の記述文と呼ぼう。これは主語に現われる a がその文の属詞 P と独立に同定されている場合である。要するに、対話者の間では主語 a はどの人 (あるいはどの物) かはすでに分かっている。(…) こうした「a は P だ」という文では a に対しある属性 P が付加されるが、対話者は a についてすでによく知っており、この属性 P を使わなくても同定できる。記述文の典型的タイプはこの種の文である。もう一つは「a は P だ」では主語 a はその文に現われる属性 P と独立には同定されておらず、むしろ P はこの同定のための手がかりを与えている。すなわち、対話者のどちらか一方が a についてほとんどなにも知らないことを表わす。これを仮に属性同定の記述文と呼ぶ。こ

の文は属性の同定によって個体の同定を助けるという機能を持っている。先の記述文は既知の対象への単なる属性の付加であったが、このタイプの記述文は未知の対象の新たな定義付けや分類を表わす。」(坂原 1990b) 25)

坂原はこのように述べて、次の疑問文と答の対が成り立つとする。

- (68) 紫式部はだれか  
a. 紫式部は平安時代の作家だ。  
b. 紫式部は源氏物語の作者だ。 (Ibid.)

この例文についてはおかしな点がふたつある。

まず第一に「紫式部はだれか」という疑問文がおかしい。もし話し手に紫式部を知らなければ「紫式部 {とは / って} 誰ですか」というメタ形式を用いた疑問文になるはずである。「紫式部はだれか」は、これから文化祭で平安時代の劇をするときに、配役を振り分けるのに用いられる指定文にしかならない。同じことは答についても言える。

次に記述文の典型的タイプとされる属性付加の記述文は、坂原の言うように「A はなにか」(A は人間でも物でもよい) という疑問文の答になることはない。これは属性同定の記述文の方である。属性付加の記述文は性質を問う疑問文の答にしかならない。

- (69) A: 花子さんはどんな人ですか。  
B: (花子さんは) 優しくてきれいな人です。  
(70) A: How is your mother?  
B: She is getting better and better.

このように属性付加の記述文は、日本語では「どんな」、英語では how でたずねる疑問文の答えにしかならず、坂原の言うように「誰か」「何か」の疑問の答えになることはない。「誰か」「何か」の疑問の答えになるのは、属性同定の記述文であり、これは Declerck の *descriptively-identifying*、西山の倒置同定文に相当するのである。

坂原の分類の問題点は、このふたつのタイプを記述文の下位タイプにすぎないとしたことである。確かに、属性付加の記述文(措定文)と属性同定の記述文(同定文)とは共通する性質がある。しかし、日本語では固有名の場合、属性同定の記述文ではメタ形式の使用が義務的であるが、属性付加の記述文ではそうではないという事実に加えて、英語やフランス語では主語代名詞が異なるという事実がある。

- (71) a. 属性付加の記述文(措定文) → 英語では he、フランス語では il  
John is {tall / a student}. → {He /\*It} is {tall / a student}.  
Jean est {grand / étudiant} → {Il /\*C'} est {grand / étudiant}

- b. 属性同定の記述文（同定文）→ 英語では *he/ that / it* 、フランス語では *ce*  
 The man over there, who is he ? — He is the son of the prime minister.  
 John Smith ? Who is John Smith ? — That is a farmer from Kent.  
 There's a policeman at the door ? — Who is it ?  
 L'homme assis à côté de Jean, qui est-ce ? — C'est le directeur de l'école.

コピュラ文でどのような主語代名詞が使われるかは、コピュラ文に生じる名詞句の指示を考えると、重要なポイントである。だから措定文と同定文というふたつのタイプを、同じ記述文に含めることには問題があると言わざるをえない。

坂原のコピュラ文の分類の第二の問題点は、名詞句の役割解釈に関係する。変化述語を持つ文 *The president often changes.* について、*the president* が役割解釈のときと値解釈のときの意味のちがいが強調されている。*the president* が値変化の役割解釈のときには、「大統領が交代する」という意味になり、値解釈のときには「個人が変貌する」という意味になる。しかし、値変化の役割解釈の場合、変化しているのは役割ではなく値である。*the president* の本当の役割解釈とは「大統領の職に就く個体が頻繁に交代する」という意味ではなく、「大統領という役職の性質がよく変化する」という意味ではないのだろうか。しかし、*The president often changes.* にこの読みをすることは不可能である。

第三の問題点は西山も指摘していることであるが、坂原のいう同定文では、A は「値変化の役割解釈を受ける非指示的名詞句」で、B は「値を同定する指示的名詞句」と規定されている。B が「太郎」のような固有名、「私」のような人称代名詞、「あの男」のような直示的名詞句のときは、確かに指示的名詞句でこれが値を与えている。しかし、次のような文で、B を指示的と呼ぶことには多少の問題があるだろう。

- (72) a この水族館の目玉はラッコだ  
 b.この実験で大事なものは水溶液の温度だ  
 c.この調査の目的は若者の意識変化だ

井元(1995) 26) が指摘しているように、「フランスの元首は共和国大統領だ」は坂原の同定文、西山の倒置指定文であるが、指示的ではない「共和国大統領」は役割に対する値として機能している。

第四の問題は、坂原の同定文「A is B」で役割名詞句とされる A として用いられているのが、「大統領」「作者」「夫」「優勝者」のような関係名詞ばかりだという点である。これらの名詞は次のように他の何かとの関係においてその存在が規定される。

- (ある国の) 大統領  
 (ある作品の) 作者  
 (誰かの) 夫

(あるコンテストの) 優勝者

これは Fraurud のいう「関数的存在」functionals で、カッコ内は anchor に相当する。この種の名詞句には役割読みを想定しやすい。ところがこのような関係名詞でなくとも、坂原のいう同定文を作ることができる。

- (73) a. 私の車はこれだ  
b. 昨日入ったレストランはあれです。

同定文「A is B」の B に、「これだ」「あれです」のような直示表現が来たときにこれは可能になる。「私の車」「昨日入ったレストラン」を役割解釈の非指示的名詞句と見なすことは難しい。このタイプの同定文については後述する。

## 2. 西山によるメンタル・スペース批判

西山 (2003) は、メンタル・スペース理論に基づくコピュラ文の分析の批判に多くのページを割いている。その論点のなかにはコピュラ文の分析にとって本質的問題が含まれている。以下では西山によるメンタル・スペース理論批判を紹介し、その批判が本当に当を得たものなのかを検討したい。

### 2.1. 変項名詞句と役割名詞句

西山がまず強調しているのは、西山のいう「変項名詞句」とメンタル・スペース理論での「役割解釈の名詞句」のちがいである。両者は一見するとよく似た概念のようにも見えるが、西山はこのふたつが本質的に異なる概念だとする。

まず西山が取り上げているのは、坂原 (1990b) 27) の次のような主張である。以下は筆者が要点のみを要約したものである。

- a. あの時の優勝者は、太郎だった。  
b. あの時の男の子は、太郎だった。  
a. では「あの時」は「優勝者」という役割の変域を表わすので、同定文 (=倒置指定文) の解釈が自然である。b. では「あの時」は役割「男の子」の変域を表わすわけではなく単なる限定辞で、b. は「昔知っていた男の子が誰かわからなくなったのを、それが太郎であると確認する」という「再認の間スペース的解釈」が自然である。

これにたいして、西山は次のように要約できる批判を展開している (28)。

- a. にはもうひとつ「あの時の優勝者は太郎という名前の持ち主だ」という記述文 (=指定文) の解釈がある。この解釈においても「あの時」が「優勝者」という役割の変域を表

わしていることには変わらない。だからコピュラ文「A is B」の A が、役割とその変域からなるということは、同定文だけの特性ではなく、記述文にも見られることがある。この事実は、坂原の次の主張と矛盾する。

次が西山が問題にしている坂原の主張である。

コピュラ文「A は B だ」が同定文であるとは、その主語名詞句 A が、値変化の役割解釈を受ける名詞句であり、述語名詞句 B がその役割の値を表わす文であるとき、そしてそのときにかぎる。

しかし、この西山の批判は的はずれである。「あの時の優勝者は、太郎だった」という文には、確かに「あの時の優勝者は太郎という名前の持ち主だ」という記述文 (= 措定文) の解釈が可能だが、その解釈において名詞句「あの時の優勝者」は指示的であり、役割名詞句ではない。指示的名詞句を修飾する「あの時の」は単なる限定辞であり、役割の変域を表わしているわけではない。

これにたいして、西山がメンタル・スペース理論に向ける第二の批判は、より複雑な問題を含んでいる。ここでは西山の批判のみを紹介し、その是非については次章で論じることにする。

西山の第二の批判は次のように要約できる (29)。

坂原が同定文ではなく再認の間スペース的解釈だとする「あの時の男の子は、太郎だった」にはもうひとつの解釈がある。

「たしかあの時、公園で誰か男の子に出会ったはずだけど、どの男の子に出会ったのか忘れてしまった。太郎だったかな、次郎だったかな、それとも三郎だったかな、・・・あっ分かった、あの時の男の子は太郎だった」

この解釈には次の図式が成立し、倒置指定文 (= 坂原の同定文) である。「あの時の男の子」は西山のいう「変項名詞句」として働いている。

[x があの時の男の子である] を満たす x の値は、太郎だった

坂原はこの文の「あの時の男の子」は〈変域+役割〉ではなく〈単なる限定辞+名詞〉だとしている。すると、〈変域+役割〉という構成を持たない名詞句を主語とする文にも倒置指定文 (= 坂原の同定文) が成り立つことになり、上の坂原の主張と矛盾する。したがって、西山のいう「変項名詞句」と坂原のいう「役割名詞句」とは別の概念である。

西山の第三の批判は次のように要約できる (30)。

坂原は「彼女の夫」は離婚・再婚によってその値を満たす個体が入れ替わることがあるので「値変化の役割解釈」を持つことができるが、「彼女の息子」は「値解釈」しか持つことが

できないとした。ところが、混雑したパーティーのなかで「彼女の息子さんはどの方ですか」とたずねられた時の次の返答は倒置指定文 (= 坂原の同定文) である。

彼女の息子さんは、あの男です

もし「彼女の息子」に「値解釈」しかないとすると、坂原の主張により倒置指定文 (= 坂原の同定文) の読みは生じないはずである。このように坂原の主張は誤った予測をする。これにたいして西山の分析は正しい予測をする。「彼女の息子」は、次の図式が示すように変項名詞句として働くことができる。

[x が彼女の息子である] を満たす x の値はあの男だ

西山の第四の批判は次のように要約できる (31)。

坂原は「エリザベス・テラーの夫」は値変化の役割解釈を持つことができるとしている。このため、次のように変化述語を持つ文では「変貌読み」と並んで「入れ替わり読み」ができるとされる。これは「エリザベス・テラーの夫」が時間を変域パラメータとして持ち、かつそのパラメータが指定されていないからである。

i) エリザベス・テラーの夫が変わった

ところが「エリザベス・テラーの 6 番目の夫」はパラメータが固定されており、リチャード・バートンという変化しない値を指す。このため次の文には「変貌読み」しかない。

ii) エリザベス・テラーの 6 番目の夫が変わった

しかし、「エリザベス・テラーの 6 番目の夫」を主語とする倒置指定文を作ることができる。

iii) エリザベス・テラーの 6 番目の夫は、あいつだ

坂原の主張では、「エリザベス・テラーの 6 番目の夫」には値変化の役割解釈がないので、倒置指定文 (= 坂原の同定文) は作れないはずである。このように坂原の主張は誤った予測をする。これにたいして西山の分析は正しい予測をする。「エリザベス・テラーの 6 番目の夫」は、次の図式が示すように変項名詞句として働くことができるからである。

[x が E・テラーの 6 番目の夫である] を満たす x の値は、あの男だ

## 2.2. 西山のメンタル・スペース批判の再検討

西山のコピュラ文分析の鍵となるのは、変項名詞句という概念であり、西山はこの概念はメンタル・スペース理論という役割とは異なるということを、再三再四強調している。この点を検討するために、西山の「変項名詞句」の定義を復習しておこう。

(74) 変項名詞句とは

コピュラ文「A は B だ」において、A が変項名詞句であるとは

- a. A は [x が A だ] という命題関数を表わしており、異なる値を取りうる変項 x を含んだ 1 項述語である。
- b. B は変項 x の場所に入る値を表わす。

例：洋子の指導教授はあのひとだ

→ [x が洋子の指導教授だ] を満たす x の値は「あのひと」だ

西山は次の例に基づいて、変項名詞句と役割とは異なる概念だとしている。

- (75) a. あの時の男の子は、太郎だった。  
b. 彼女の息子さんは、あの男です。

その論点をまとめると次のようになる。

- (76) a. コピュラ文「A は B だ」において、主語名詞句 A が役割解釈できるためには、A が〈変域+役割〉の構成を持たなくてはならない。  
b. しかるに上の例の「あの時の男の子」「彼女の息子さん」は、〈限定辞 + 名詞〉であり〈変域+役割〉の構成を持たないので、役割解釈はできないはずである。  
c. しかし上の文には倒置指定文の解釈ができる。「あの時の男の子」「彼女の息子さん」も、変項名詞句として働くからである。

さて、この西山の議論が有効かどうかを検証してみよう。

「あの時の男の子は、太郎だった」が次のような状況での発話だとする。

#### (77) 「あの時の男の子は、太郎だった」の解釈 1

先週、道に迷って困っていたら、男の子が助けてくれた。その子は名前を名乗らないで立ち去ってしまった。お礼を言いたくて探していたら、ある人がその男の子の特徴を聞いて、「その子なら山田太郎といううちの大学の学生だよ」と教えてくれた。

この状況での発話「あの時の男の子は、太郎だった」は、「あの時の男の子は誰だったんだろう」という同定を求める質問にたいする答えとなる。これは、指示対象はわかっているが、その正体が不明なので、倒置同定文 (Declerck の *descriptively identifying sentence*) に当たる。この解釈は議論に関係ないので問題にしないことにする。

西山が問題にしている解釈をより鮮明にするため、次のような状況を考えてみる。

#### (78) 「あの時の男の子は、太郎だった」の解釈 2

隣の家で殺人事件があった。私はたまたまその時、新聞を取ろうと玄関先に出て行って、隣の家から駆けだして行く男の子の後ろ姿をちらっと見かけたが、誰なのかはわからなかった。警察の捜査で、犯人は隣の家太郎・次郎・三郎という3人の息子に絞られた。私が目撃したのは、この3人のうちの誰かである。その後の捜査で犯人は太郎だと判明した。私が目撃したのは太郎だったのである。

この状況下での発話「あの時の男の子は、太郎だった」は、「あの時の男の子は、太郎・次郎・三郎のうちのどれだったんだろう」という指定を求める質問への答えとなる。だからこれは西山の主張するように「倒置指定文」（坂原のいう同定文）に他ならない。また、「あの時の男の子」は私が目撃した世界内の個体であるので、領域パラメータの変化によって異なる値をとる役割名詞句と見なすことはできない。これも西山の言う通りである。

ところが問題はここからである。もし西山の言うように、「あの時の男の子は、太郎だった」に倒置指定文の解釈ができるならば、「あの時の男の子」を変項名詞句と見なす必要がある。ところが、変項名詞句は非指示的名詞句だったはずである。西山は次のようにはっきり述べている。

「倒置指定文『A は B だ』について、重要な特徴は、主語名詞句 A は世界のなかの個体を指示するような働きを一切もたず、非指示的である、という点である。(…) 倒置指定文『A は B だ』の A が指示的でないと言う理由は、A が『x が洋子の指導教授である』という命題関数を表示していることにある。このような名詞句 A を筆者は『変項名詞句』と呼ぶ。」32)

(78) の例の「あの時の男の子」は、私が目撃した人物であり指示的でしかありえない。それにもかかわらず変項名詞句として働くとされている。ここに西山の分析の大きな矛盾点がある。

この矛盾を解明するヒントは西山が「第二のタイプの指定文」とした次の例にある 33)。

(79) [映画の試写会で、女優の沢口靖子と隣り合った席で]

- a. 太郎：あなたは、あの女医ですね。
- b. 沢口：いえ、わたくしは、女医のそばの看護婦です。

(80) [昔の写真を見ながら]

- a. 太郎：ねえ、ぼくがわかる？
- b. 花子：そうね、あなたはきっと、この左端の坊やでしょう。

この例では「あなた」「わたくし」のような直示的で指示的な代名詞が、倒置指定文の変項名詞句 A の位置を占めている。これについて西山は次のように述べている 34)。

「注意すべきは、『第二タイプの指定文』の解釈において、A はそれ自体、指示的名詞句でありながら、変項名詞句の機能を持つ、という点である。(…) このような解釈が可能であるためには、〈過去の知識（やイメージ）と目の前の現実〉、〈現実と映画〉、〈現実の被写体と写真〉といった複数のメンタル・スペースがつねに関与している、という点に注意する必要がある。(…) 複数のメンタル・スペースが関与しているからこそ、ひとつのメンタル・ス



ペース R において A の指示対象を定め、もうひとつのメンタル・スペース M において A の対応物 (counterpart) を探すことができるのである。(…) 指示的名詞句でありながら、同時に変項名詞句の機能を果たすという表面的な矛盾はこのようにして解決されると思われる」

西山はこのようにして、「指示的名詞句でありながら、変項名詞句として働く」という矛盾を解決しようとした。しかし、そのために導入したのは、〈過去の知識 (やイメージ) と目の前の現実〉、〈現実と映画〉、〈現実の被写体と写真〉といった複数のメンタル・スペースである。つまり、同一スペース内では、ひとつの名詞句が指示的でありながら変項名詞句として働くことはないが、複数のスペースが介在するときには、指示的名詞句が変項名詞句として働くことを主張しているのである。

しかし、西山のこの主張には問題がある。なぜなら 2.1. ですで見たとおり、西山は「エリザベス・テラーの夫」は値変化の役割解釈を持つが、「エリザベス・テラーの 6 番目の夫」は、パラメータが固定されており値解釈しか持たないにもかかわらず、次の文では変項名詞句として働くことを述べた。

(81) エリザベス・テラーの 6 番目の夫は、あの男だ。

「エリザベス・テラーの 6 番目の夫」には値解釈しかなく、指示的名詞句のはずである。ところがこの名詞句は、上の例が示しているように変項名詞句として働くことができる。西山が「第二のタイプの指定文」について述べたことをここに当てはめると、この文にも複数のメンタル・スペースが介在しているということにならざるをえない。ところが、一般にはこの文は単一スペース内で解釈されると考えられているのである。ここには、西山が複数のスペースの例としてあげた〈過去の知識 (やイメージ) と目の前の現実〉、〈現実と映画〉、〈現実の被写体と写真〉のようなものはないはずだ。にもかかわらず、指示的名詞句が非指示的な変項名詞句として働いているのはなぜか。

なぜこのような結果になるのだろうか。それは西山が坂原のメンタル・スペースによるコピュラ文の分析を批判するとき、「(坂原のいう) 役割名詞句とは見なせない値名詞句でも、(西山のいう) 変項名詞句として働くことがある」という主張を裏付けるために出された例文は、すべて次の例のように、「A は B だ」の B に直示的要素を持つものだからである。

- (82) a. 彼女の息子さんは、あの男です。  
b. エリザベス・テラーの 6 番目の夫は、あの男だ。

実は、「A は B だ」の B に直示的要素を持ってきたら、A が指示的か非指示的か、役割か値かに関係なく、常に倒置指定文として成立するのである。

- (83) a. [指さしながら] 小泉純一郎はあの人です。

- b. [昔の写真を見ながら] 私はこれです。
- c. [実物と写真を見比べながら] これはこれだ。

「小泉純一郎」のような固有名も、「私」のような指標詞も、「これ」のような指示詞も、倒置指定文の主語、すなわち西山のいう「変項名詞句」になる。これはどういうことだろうか。本来、固有名や「私」のような指標詞や「これ」のような指示詞は直示的であり、常に指示的である(35)。西山自身が次のように述べているとおりである(36)。

「直示表現については、その内在的性質からして一般に指示的名詞句としての使われ方しかされないのである」

上の例(83)b. と c. には、確かに複数のスペースが介在している。しかし、(83)a. はそうではなく、ふつう単一スペースで成立する文だと考えられている。西山が「第二のタイプの指定文」について述べた主張を保持しようとするならば、(83)のように「A は B だ」の B に直示的要素を持つ文には、(83)a. も含めてすべて複数スペースが関与しているとせざるをえない。これは次のような仮説を立てることを意味することになる。

## 仮 説

発話の場合は、言語表現にたいして独立したひとつのスペースとして働く

ところがもしこれを認めるとすると、西山が坂原にたいして行なった批判は有効性を失うことになる。なぜなら西山が根拠とした例、「エリザベス・テラーの6番目の夫は、あの男だ」などは、すべて「間スペース的コピュラ文」として処理できるからである。「間スペース的コピュラ文」の典型は「ジキルはハイドだ」型の同一性文であり、この場合「A は B だ」の A も B も指示的名詞句であって役割名詞句ではない。「倒置指定文の主語 A には役割名詞句とは見なせないものがある」という点が西山の坂原批判の中心であったのだから、もし(83)の倒置同定文をすべて「間スペース的コピュラ文」と見なすことにしたら、西山の批判はその根拠を失うことになるのである。

### 2.3. 倒置指定文の分析と指示のパラドックス

コピュラ文のなかでも倒置指定文は、「名詞句の指示とは何か」という指示理論の根幹に関わる問題を提起するため、とりわけ手強い課題であると言える。前節では倒置指定文「A は B だ」の B に直示的要素が来た場合を取り上げて、西山のメンタル・スペース批判が当たらないことを論じた。本節では西山がメンタル・スペースを批判するとき用いたもうひとつの論法を取り上げて検討してみたい。

それは次のような論理である(37)。

(9) 1992年10月現在のフランスの大統領

は、時期、国といった使用状況に応じて異なった個体を指す表現ではなく、つねに特定の個体（つまりミッテラン）を指す。（...）したがって、1992年の10月現在、フランスには大統領がただひとりしか存在しないという仮定のもとでは名詞句(9)は、役割ではありえなく、つねに値を表わすといわざるをえない。

(10) 1992年10月現在のフランスの大統領が変わった。

(...) さらに (10) における主語名詞句を、同じ対象を表わす別の表現、たとえば「ミッテラン」でおきかえても問題ないという事実は、「1992年10月現在のフランスの大統領」が値解釈を、そして値解釈だけを受けることを裏づけている。ところが、注意すべきは、このような値解釈しか可能でない名詞句を主語にして、(11)のごとく、倒置指定文を構築できる、という点である。

(11) 1992年10月現在のフランスの大統領は、あの男だ。

(...) 上で見たように、メンタル・スペース理論の立場では、この主語名詞句にはパラメータが固定されており、値解釈しか与えられない以上、(11)を同定文 [=西山の倒置指定文：東郷注] とみなすわけにはいかない。

西山の論法では、「1992年10月現在のフランスの大統領」はパラメータがすべて固定されているので値解釈しかできないことになり、かつライブニッツの法則が成り立つのだから、「1992年10月現在のフランスの大統領」を値である「ミッテラン」でおきかえても問題がないことになる。確かに「変わった」のような変化述語を持つ文においてこの代入操作を行なうと、次の例の示すようにどちらも「変貌読み」（＝個体の容貌・性格などが変化したという読み）になり、意味的に同値である。

(84) a. 1992年10月現在のフランスの大統領が変わった。

b. ミッテランが変わった。

ところが、問題はこの論理をそのままコピュラ文に持ち込むことができないという点にある。これこそがコピュラ文が持つ他の構文にはない特徴なのである。同じ代入操作を施した次の文は、果たして同じ意味であろうか。

(85) a. 1992年10月現在のフランスの大統領は、あの男だ。

b. ミッテランは、あの男だ。

もっとわかりやすくするために、次のように書き換えてみよう。

(86) a. 今のフランスの大統領は、あの男だ。

b. シラクは、あの男だ。

西山の論理に従えば、このふたつの文は同じ意味になるはずである(38)。しかし直感的にわかるように、このふたつの文は同じ意味内容を伝えるものではない。a. は「今のフランスの大統領が誰か知らない人」に対して発する文であり、b. は「シラクがどの人か知らない人」に対して発する文である。a. は「壁際に立っている長身のやや禿かかった男」を指さしながら述べて、「シラク」という名前を言わなくても指定文として成立する。一方、b. は「シラク」という名前の男を捜している人に答える文であり、シラクが大統領だということを知らなくても指定文として成立する。たとえば、「溺れかかった自分の子供を助けてくれた人がシラクというフランス人だった」という人に対して b. を述べたとき、b. は求められた情報を伝える指定文として成立する。だから、次のような質問と答えのペアを作ると、求められた情報と伝達された情報が食い違うためおかしくなる。

- (87) A: 今のフランスの大統領はどの人ですか。  
B: #シラクは、あの男だ。
- (88) A: シラクはどの人ですか。  
B: #今のフランスの大統領は、あの男だ。

代入でさらに深刻な問題を引き起こすのは、次の例である。「1992年10月現在のフランスの大統領」と「ミッテラン」は同じ人をさすので、ライブニッツの法則によれば代入できるはずだがうまく行かない。a. は情報価値のある言明だが、b. は同語反復である(39)。

- (89) a. 1992年10月現在のフランスの大統領は、ミッテランだ。  
b. ミッテランは、ミッテランだ。

なんのことはない、これは Frege の「明けの明星」と「宵の明星」のパラドックスと同じである。だから、上の引用で西山が、「1992年10月現在のフランスの大統領」という値解釈しか持たない指示的名詞句を主語にして、「1992年10月現在のフランスの大統領は、ミッテランだ」という倒置指定文を作れると主張するのは、実は適切なメンタル・スペース批判にはなっていない。

西山の批判は図らずも、少なくとも倒置指定文(40)の分析には、複数のメンタル・スペースを介在させなくてはならないということを示すものとなっている。なぜなら西山の論法のように、「1992年10月現在のフランスの大統領はすべてのパラメータが固定されているので値解釈しかない」ということが、世界中のすべての人に等しく成り立つならば、「1992年10月現在のフランスの大統領は誰ですか」という質問も、「1992年10月現在のフランスの大統領は、ミッテランだ」という答えも発せられることはないからである。「1992年10月現在のフランスの大統領は誰ですか」という質問は、「1992年10月現在のフランスの大統領」の指す人を知らないときに発せられる。言い換えれば、「1992年10月現在のフランスの大統領」

が役割のみで値が付与されていないスペースの存在を前提としているのである。

このことを明らかにするために、少し寄り道になるが、名詞句の指示における不透明な文脈の問題を見ておこう。

#### 2.4. 名詞句の指示と不透明な文脈

さて、ライブニッツの法則とは、「命題中に含まれた指示表現を、等しい外延を持つ別の指示表現と置き換えても、命題の真偽値は変わらない」というものであった。この法則が成り立つのは、次のような透明な文脈に限られる。透明な文脈とは、個人の信念などが関係しない事実モードである。

- (90) a. Jacques Chirac was born in 1931.
- b. The present president of France was born in 1931.

一方、ライブニッツの法則が成り立たない不透明な文脈には、次のふたつのケースがあると言われているのも周知のことである。

- (91) opaque context (1) : Modal context
  - a. Yuri Gagarin might not have been the first man in space.
  - b. Yuri Gagarin might not have been Yuri Gagarin.
- (92) opaque context (2) : Propositional attitude verbs
  - a. Ralph believes that the man he saw is a spy.
  - b. Ralph believes that Ortcutt is a spy.

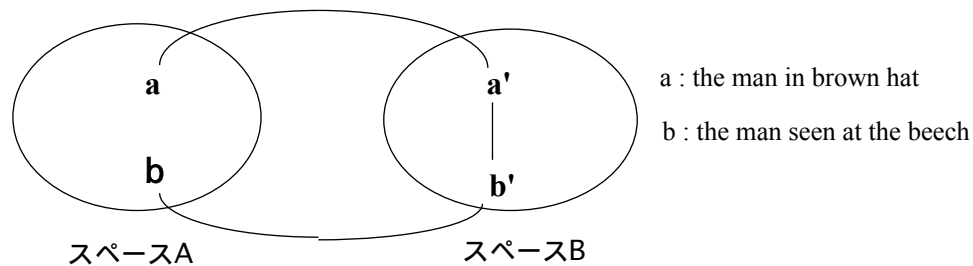
不透明な文脈が関係するときには、演算子の作用域の問題として処理されている。Ralph は茶色の帽子の男をスパイだと思っており、この男は Ralph が海岸で見かけた Ortcutt と同一人物なのだが、Ralph はそのことを知らないという状況を考えてみる。

- (93) a. Ralph believes that the man in brown hat is a spy.
- b.  $(x : \text{Ralph}) (x \text{ believes } [\text{the } x : \text{man in brown hat } (x) ] [x \text{ is a spy}] )$
- (94) a. Ralph believes that the man seen at the beach is a spy.
- b.  $(x : \text{Ralph}) (\text{the } x : \text{man seen at the beach } (x) ) (x \text{ believes } [x \text{ is a spy}] )$

(93) の the man in brown hat は、Ralph の信念の中で解釈される不透明な読みである。(94) の the man seen at the beach は Ralph の信念の外にあり透明な読みである。この読みのちがいは、問題の名詞句が believes という propositional attitude verb にたいして、広い作用域を取るか狭い作用域を取るかという問題だとされている。このように演算子の作用域が異なるとき、たとえ「現実世界においては」同一指示であっても、the man in brown hat と the man

seen at the beach とは入れ替えることができない。

さて、メンタル・スペース理論はこのような問題をスペースという心的装置を用いて取り扱う理論である。上の例における作用域のちがいを、簡略化したスペースを用いて表示すると、次のようになる。



スペース A は Ralph の信念スペースである。a = the man in brown hat と b = the man seen at the beach というふたつの個体が登録されているが、Ralph は別の人物だと謝って信じているので、a と b は別の個体とみなされている。スペース B は (93) (94) の話し手のスペースである。これは「現実スペース」であるとは限らない。a' は a の対応物で、両者は ID コネクタで結合されている。b と b' も同様である。ただし、スペース B では、a' と b' とは ID コネクタで結合されており、同一個体である。

(93) Ralph believes that the man in brown hat is a spy. は Ralph の信念の内容を表わしているので、名詞句 the man in brown hat はスペース A において解釈される。ただし、このとき同じ名詞句はスペース B で解釈されても同じ結果になる。一方、(94) Ralph believes that the man seen at the beach is a spy. の方は、スペース A で解釈されたら偽となる。名詞句 the man seen at the beach はスペース B で解釈されなければならない。このように、複数のスペースが関係する命題に関しては、ライブニッツの法則が成り立たない場合があるのである。

ここから次の仮説を導くことができる。

### 仮説 1

指示表現を含む命題は、適切なスペースと相対的に解釈されねばならない。指示表現を含む命題の真偽は、スペースに相対的である。

さきに、「1992年10月現在のフランスの大統領は、ミッテランだ」の下線の名詞句に、その値である「ミッテラン」を入れ替えると、「ミッテランはミッテランだ」のように同語反復になり、意味有る指定文として成立しなくなることを見た。ということは指定文もまた、複数のメンタル・スペースが介在していることになる。だから指定文はライブニッツの法則の成り立たない不透明な文脈なのである。

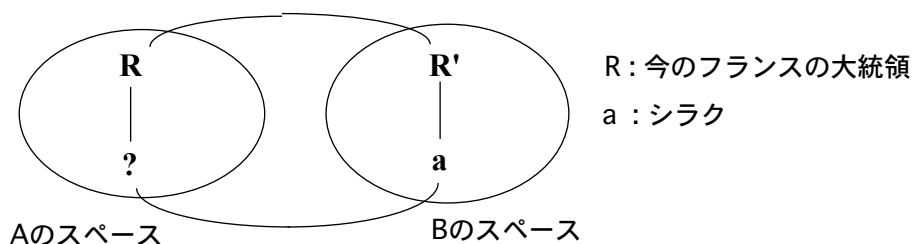
ここから次の仮説を導くことができる。

### 仮説 2

指定文は不透明な文脈を形成する。

指定文の意味解釈をメンタル・スペース的に図示すると次のようになる。次の例文を考える。

- (95) A: 今のフランスの大統領は誰ですか。  
B: (今のフランスの大統領は) シラクです。

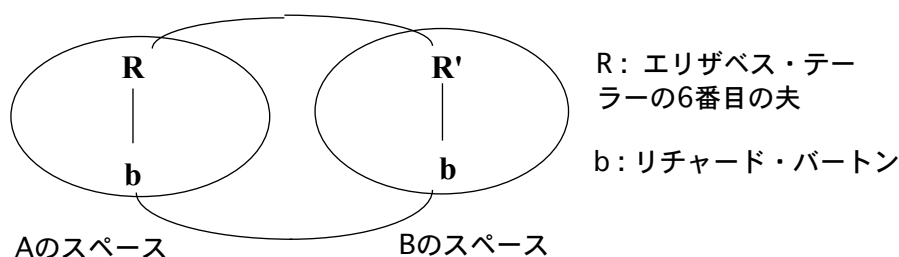


R は「今のフランスの大統領」という役割を表わす。A も B もフランスには大統領がいるということは知識として知っているの、スペース A にも B にも R は登録済みであり、両者は間スペース的 ID コネクタで結合されている。スペース B には役割 R を満たす値 a 「シラク」が登録されており、R' と a は「役割・値コネクタ」で結合されている。ところがスペース A では役割 R を満たす値が不在である。A は大統領が誰か知らないからである。「今のフランスの大統領は誰ですか」のような指定を求める疑問文は、上のように「知識状態の非対称性」を前提として発せられるものである。つまり、A は誰が大統領か「知らない」ということが肝心なのである。A がたまたま「知らない」というのは、コンピュータ文の意味論に属するのか、それとも語用論に属するのだろうか。多くの方は「語用論」だと答えるだろう。ならば、指定文という文タイプは語用論を考慮して初めてその意味機能が明らかになるのである。

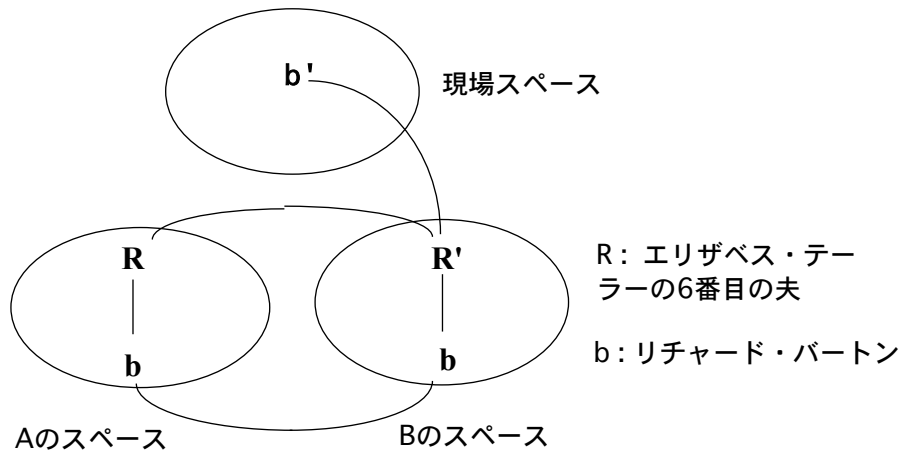
もうひとつ次の例を考えてみよう。この発話は、エリザベス・テラーの 6 番目の夫がリチャード・バートンであることを、ふたりとも知っている場合だとする。

- (96) A: エリザベス・テラーの 6 番目の夫はどの人ですか。  
B: エリザベス・テラーの 6 番目の夫は、あの男だ。

このときの二人の知識状態を表わすスペース構成を考えると、次のようになる。



しかしこれではふたりの知識状態は同じであり、知識状態の非対称性を前提とする指定文が出てくる余地はない。ここには発話の現場というもうひとつのスペースが介在しているのである。



B は「エリザベス・テラーの 6 番目の夫」すなわちリチャード・バートンが、パーティー会場にいるどの人かを知っている。だからスペース B で役割 R' は、現場スペースに登録された個体 b' と役割・値コネクタで結合されている。一方、A はパーティー会場のどの人が「エリザベス・テラーの 6 番目の夫」なのかわからないので、スペース A の役割 R は現場スペース内の要素と結合されていない。このように、現場スペースを介在させることで初めて、話し手と聞き手のあいだの知識の非対称性が生まれ、指定文が有意味な発話として働くことができるのである。

### 3. 談話モデル理論によるコピュラ文分析

それではここからは、談話モデル理論によるコピュラ文の分析を示し、それが西山の分析に見られた問題点をどのように解決することができるかを見てみよう。

#### 3.1. 談話モデルの概要 41)

談話モデル理論では、談話を次のように定義している。

##### 談話の定義

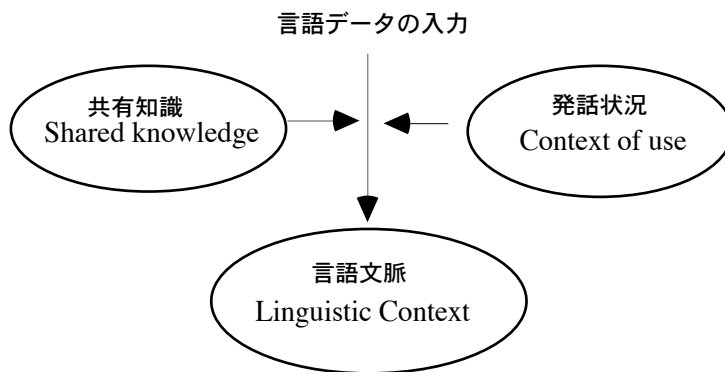
談話とは、話し手と聞き手の相互行為 (interaction) として、時系列に沿って局所的に構築される累積的な (incremental) 心的表示 (mental representation) である。

談話モデル Discourse Model とは、話し手と聞き手の双方が保持し、談話の構築にあたって発動される心的領域である。この心的領域は、談話の指示対象 discourse referent と、そ



れに関する情報が格納される一種のファイルシステムである。談話モデルは次の部分領域からなる。

- a. 共有知識領域 Shared Knowledge
- b. 発話状況領域 Context of Use
- c. 言語文脈領域 Linguistic Context



共有知識領域は、百科辞典的知識領域とエピソード領域からなる。百科辞典的知識領域には「コロンブス」のような百科事典的個体、「地球」のような唯一物が登録され、総称的発話の基盤となる。エピソード領域には話し手の個人的体験や友人などが登録される。次の例の Columbus、the earth、Paul は共有知識領域において解釈を受ける。

- (97) a. Columbus discovered America in 1492. [固有名]  
 b. The earth goes round the sun. [唯一物]  
 c. Have you heard of Paul ? [個人的エピソード記憶]

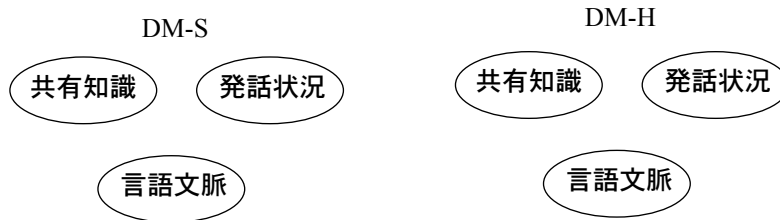
発話状況領域は話し手と聞き手を含む発話の場の心的表示である。話し手 I、聞き手 you を初めとして、直示的発話はこの領域において解釈を受ける。

- (98) a. [指さしながら] Pass me that hammer.  
 b. [セーターを指さしながら] I'll take this.  
 c. [部屋に入って来た人に] Shut the door.

言語文脈領域は時系列に沿って展開する談話の内容が登録される領域であり、初期値はゼロで、順次累積的に discourse referent やそれに関する情報が登録される。次の例では、最初の文の不定名詞句 a wizard , a witch によってそれぞれに対応する discourse referent が言語文脈領域に登録される。このように登録された対象は、次からは the wizard のような照応的定名詞句や he などの人称代名詞によって照応することができる。照応現象は基本的にはこの言語文脈領域において行なわれる。

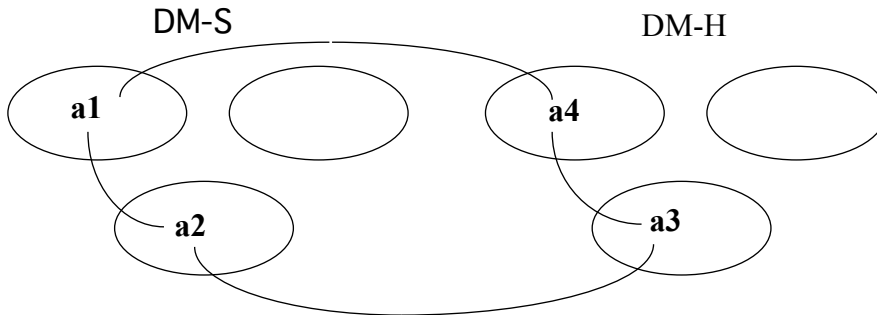
(99) There lived a wizard and a witch in Africa. The wizard had a son.

話し手と聞き手は、それぞれ自分の談話モデルを持つ。話し手のモデルを DM-S、聞き手のそれを DM-H と表示する。談話モデルの基本形は次のような形になる。以下の図では楕円のなかの「共有知識」などの語句は煩瑣になるので省略する。



それぞれの領域に登録された discourse referent は、ID コネクタや役割・値コネクタにより結合される。まず、共有知識領域に登録された Paul が次の文でどのような解釈を受けるかを図示する。

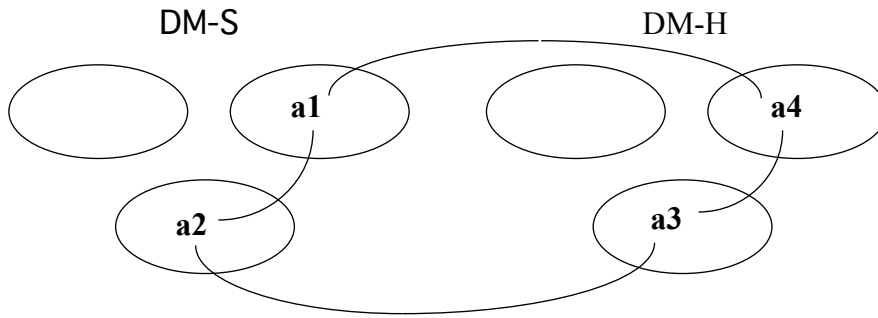
(100) Have you heard of Paul ?



話し手 S の共有知識領域に登録された a1 は Paul をさす。話し手は Have you heard of Paul? と発話することで、Paul を a2 として自分の言語文脈領域に登録する。これは聞き手側の DM-H の言語文脈領域にすぐさまコピーされ a3 となる。聞き手 H も Paul とは旧知の間柄なので、それは a4 として DM-H の共有知識領域にもすでに登録されている。こうして a1 a2 a3 a4 はすべて ID コネクタにより結合され、解釈は完了する。

次に発話状況領域に登録された discourse referent の解釈を示す図をあげる。

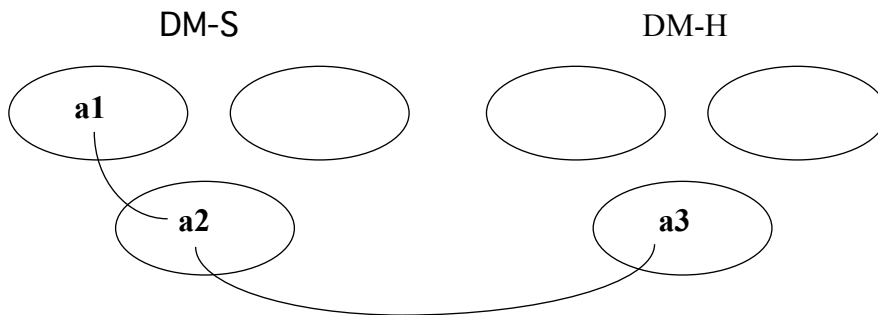
(101) Pass me that hammer.



that hammer は DM-S の発話状況領域に登録されている。話し手は Pass me that hammer. と発話することで、that hammer の指示対象を自分の言語文脈領域に登録する。これはすぐさま DM-H の言語文脈領域にコピーされる。聞き手は発話の場を見回すとその指示対象 a4 が発話状況領域に見つかる。こうして a1 ~ a4 は ID コネクタで結合され、指示表現の解釈は完了する。

次は言語文脈領域である。

(102) There lived a wizard and a witch in Africa. The wizard had a son.



話し手は There lived a wizard and a witch in Africa. という発話により、a wizard と a witch の discourse referent を自分の言語文脈領域に登録する。ここでは a wizard に対応する a2 だけを表示する。a2 はすぐさま DM-H の言語文脈領域に a3 としてコピーされる。共有知識領域や発話状況領域とはちがい、a wizard と a witch という名詞句の処理はここまでで停止する。このように言語文脈領域のみが関係する発話においては、話し手と聞き手の知識状態に非対称性が生じる。The wizard had a son. の照応的定名詞句 the wizard は、言語文脈領域に登録された a2 = a3 として同定される。

ここから次の原則を導くことができる (42)。

**原則 1**

人称代名詞や定名詞句などの指示表現の指示対象が同定されるには、その指示対象がすでに談話モデルのいずれかの領域に登録済みでなくてはならない。

### 3.2. 指定文のパラドックス

以上のような理論的装置を前提として、指定文がどのような手順で意味解釈を受けるかを考えてみよう。

- (103) A: 今のフランス大統領は誰ですか。  
 B: 今のフランス大統領はシラクです。

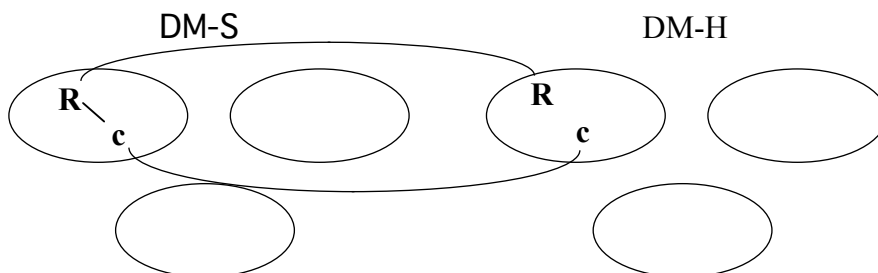
この談話例では、次のふたつの知識状態を考えることができる。

- i) A はシラクをフランスの政治家の一人として知っているが、シラクが大統領であることを知らない場合  
 ii) A がシラクという政治家をまったく知らない場合
- i) から想定されるのは(104) の談話例、ii) から想定されるのは (105) の談話例である。

- (104) A: 今のフランス大統領は誰ですか。  
 B: 今のフランス大統領はシラクです。  
 A: ああ、あのシラクが大統領だったんですか。知らなかったなあ。

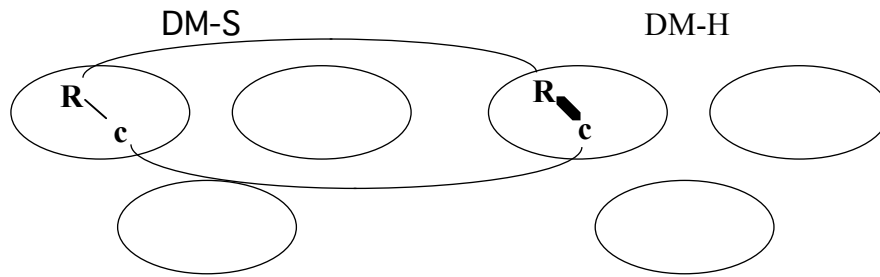
- (105) A: 今のフランス大統領は誰ですか。  
 B: 今のフランス大統領はシラクです。  
 A: そうですか。大統領はシラクという人なんですか。おかしな名前ですね。

まず i) に相当する談話モデル構成を考えよう。発話以前の談話モデルは次のようになる。R は「フランスの大統領」という役割、c は「シラク」という個体に相当する discourse referent である。上の談話例の B に当たる DM-S では、役割「フランスの大統領」に値「シラク」が割り当てられているが、A の DM-H では R と c はコネクタで結合されていない。これは、A はシラクという政治家は知っているが、大統領であることを知らないという知識状態を表わしている。

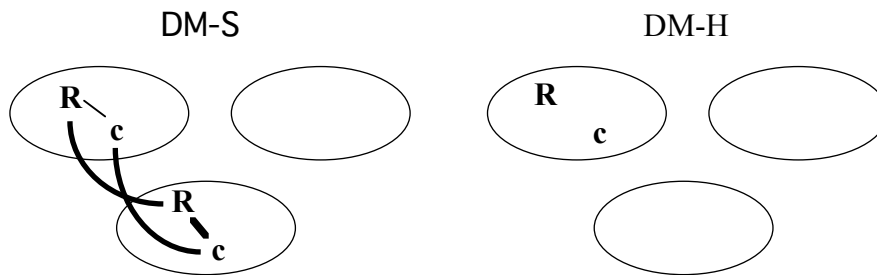


B の「今のフランス大統領はシラクです」という指定文は、上の談話モデルを次の状態にア

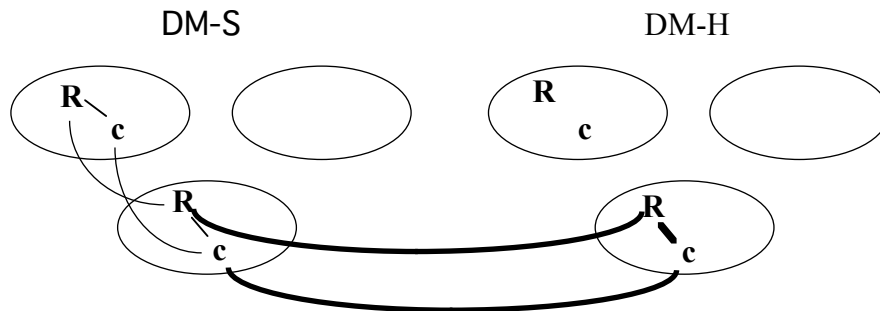
アップデートする働きをする。上の図では結合されていなかった DM-H 内の R と c が、役割・値コネクタ（太い黒線）で結合されていることに注目されたい。



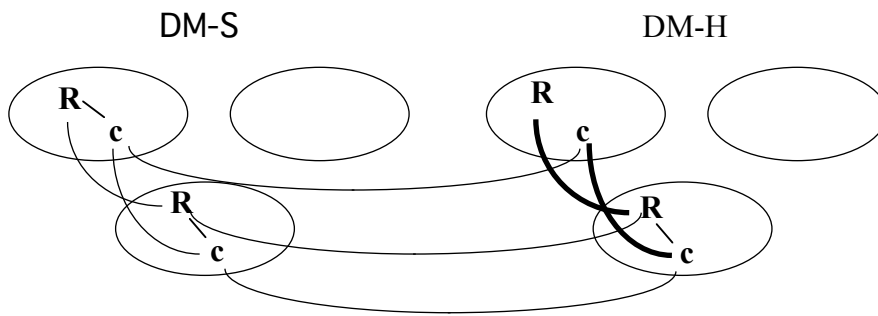
最終的に上の図の状態にアップデートするには、次のような手順を踏むことになる。わかりやすいように順番に示していく。太い線の部分が、前の状態から更新された箇所を表わす。まず、B の「今のフランス大統領はシラクです」という発話により、DM-S の共有知識領域にある R と c を言語文脈領域にコピーし、両者を役割・値コネクタで結合する。



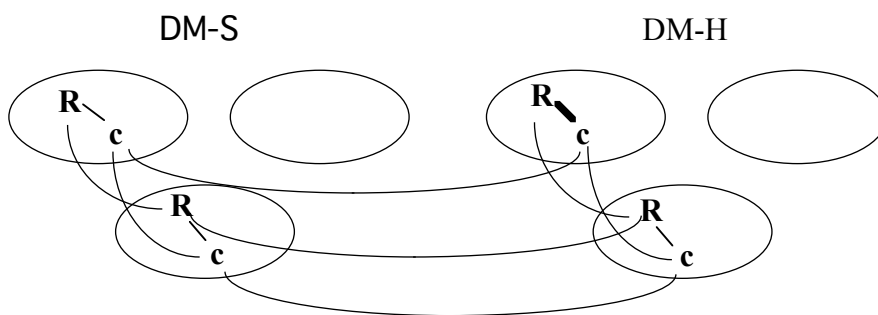
次に DM-S の言語文脈領域に登録された R と c とコネクタは、すぐさま DM-H の言語文脈領域にコピーされる。



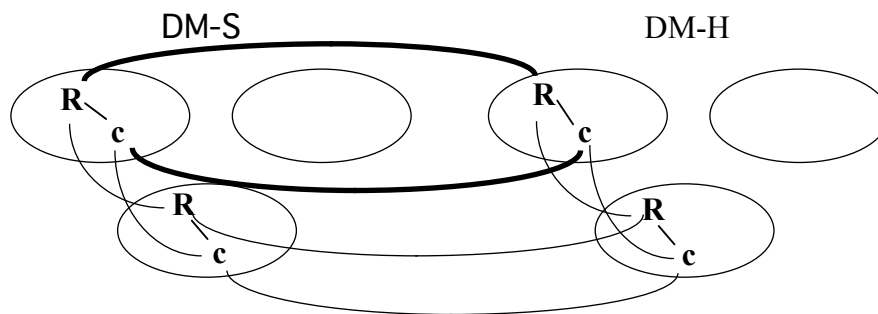
次に聞き手 A は、自分の DM-H の言語文脈領域に登録された R「フランスの大統領」と c「シラク」が、自分の共有知識領域に以前から存在する R「フランスの大統領」と c「シラク」と同一であることを確認し、ID コネクタで結合する。



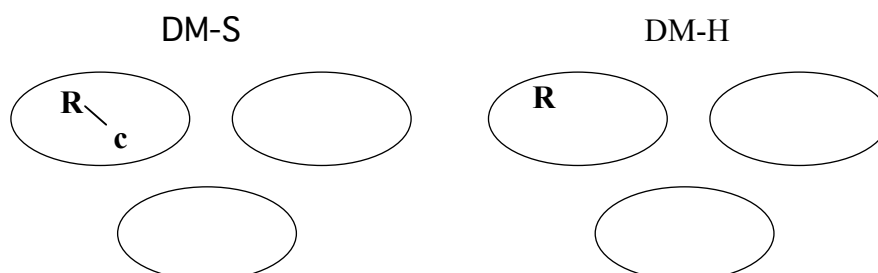
次に聞き手 A は、こうして自分の DM-H の共有知識領域に以前から R「フランスの大統領」と c「シラク」を役割・値コネクタで結合し、「フランスの大統領はシラクだ」という命題内容を新たな知識として登録する。



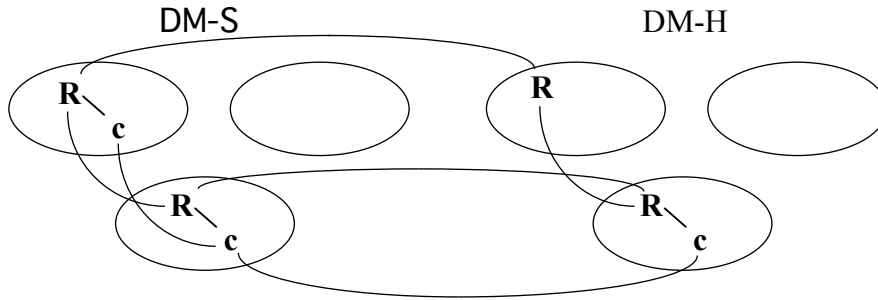
これと平行して、DM-S 内の R、c と、DM-H 内の R、c は、ID コネクタで結合される。こうして指定文「フランスの大統領はシラクだ」の意味解釈が完了し、話し手と聞き手の知識状態は同じになる。



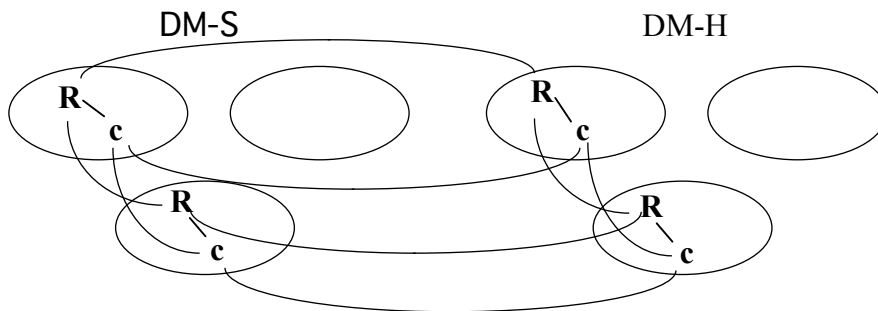
次は聞き手がシラクを知らない上記 ii) の場合である。発話前の談話モデル構成は次のようになる。i) と異なるのは、DM-H には R のみがあらかじめ存在し、c「シラク」は登録されていないという点である。



問題の指定文の発話によってアップデートされた談話モデル構成は次のようになる。



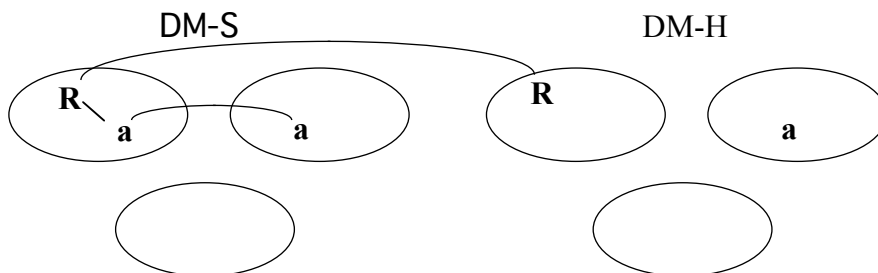
この段階では、DM-H に c は登録されていないため、「フランスの大統領はシラクです」という指定文は、実質的には「フランスの大統領はシラクという人です」という措定文と同じ意味効果を持つ。この段階から次に、DM-H の言語文脈領域にある c が共有知識領域に転送されて、最終的に次の状態にアップデートされる。この言語文脈領域から共有知識領域への転送が、「学習効果」である。



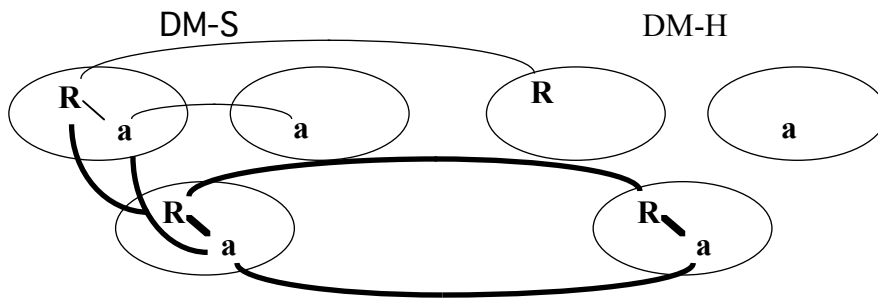
次に指定文「A は B だ」の B が直示的要素である場合を見てみよう。

- (106) A: この船の船長は誰ですか。  
 B: 船長はあの人です。

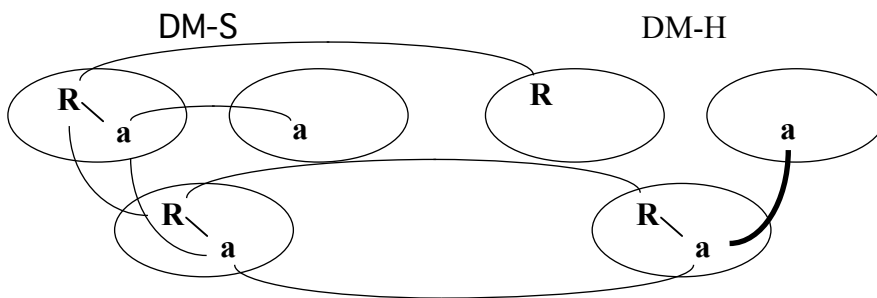
発話前の談話モデル構成は、次のようになる。R は役割「この船の船長」43)、a は「あの人」を表わす。この状態で a 「あの人」は、DM-S と DM-H の両方の発話状況領域に存在している。この a は、DM-S の共有知識領域においてのみ、R と役割・値コネクタで結合されている。発話状況領域の a が共有知識領域にコピーされて R と結合されているのは、貯蔵されている知識はすべて共有知識領域に登録されていると仮定しているためである。



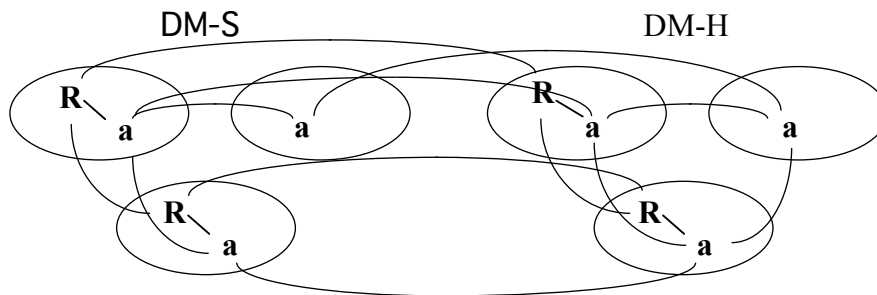
「この船の船長はあの人です」という指定文により、DM-S の R と a は言語文脈領域にコピーされ、それはすぐさま DM-H の言語文脈領域にコピーされる。



次に聞き手が言語表現「あの人」のさす a が、自分の DM-H の発話状況領域にあらかじめ存在する a と同一であると確認した時点で、両者は ID コネクタで結合される。



次に聞き手は「この船の船長はあの人です」という指定文の内容を知識として登録するために、発話状況領域の a を共有知識領域にコピーしてから R と役割・値コネクタで結合し、次の状態に至る。これで発話の理解が完了する。



次は西山が「第二の指定文」と呼んだ例である。

(107) [写真を見ながら]

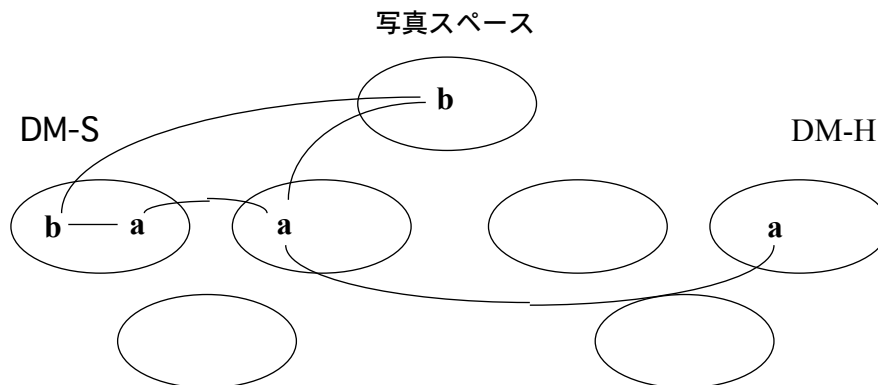
A: あなたはどれですか。

B: 私は右端の男の子です。

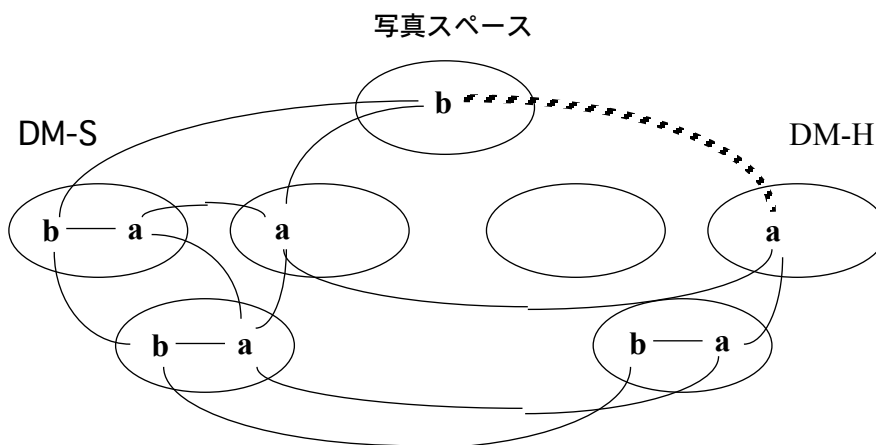
発話前の談話モデル構成は次のようになる。a は上の例で「あなた」「私」と呼ばれている話し手 B をさす 44)。談話モデルの発話状況領域には、デフォルト要素として話し手の「私」と聞き手の「あなた」は登録されており、いつでも直示的に用いることができる。下の図が



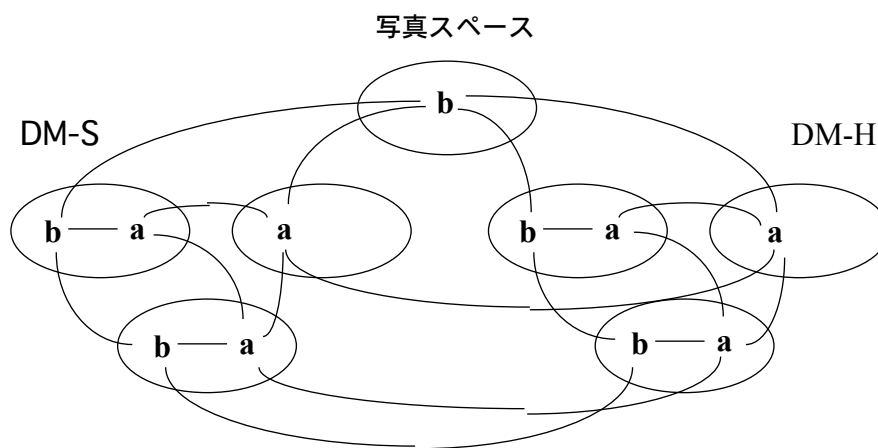
今までと異なるのは、談話モデルに新たに「写真スペース」が追加されている点である。「写真スペース」にある **b** は「右端の男の子」をさす。話し手はこの男の子なので、**a** と **b** は共有知識領域におけるその対応物のあいだでイメージ・コネクタで結合されている。



「私は右端の男の子です」という指定文により、「私」**a** と「右端の男の子」に相当する **discourse referent** の **b** が、DM-S の言語文脈領域にコピーされ、次に DM-H の言語文脈領域にコピーされる。「私は右端の男の子です」という指定文のもたらすアップデート効果は、DM-H の発話状況領域にある **a** 「私」と写真スペースにある **b** 「右端の男の子」を結合する破線で描いたイメージ・コネクタが確立されることにある。



こうして聞き手はその知識を DM-H の共有知識領域に転送し、発話の理解は完了する。



以上の分析が正しいとするならば、次のような帰結を得ることになる。

### 帰 結 ( 1 )

西山が指摘しているように、映画や写真などのスペースが関係しているときには、「私は (写真の) 右端の男の子です」「私は (映画のなかの) 看護婦です」のように、本来は指示的であるはずの「私」のような要素も、指定文「A は B だ」の主語 A の位置に立つことができる。指示的な「私」があたかも非指示的であるかのように振る舞うのは、「写真スペース」「映画スペース」などが関係しており、談話モデルのなかの発話状況領域の「私」と「写真スペース」のなかの「右端の男の子」が、間スペース的コネクタで結ばれるためである。

### 帰 結 ( 2 )

「この船の船長はあの人だ」のように、指定文「A は B だ」の B に直示的要素が来る場合も、間スペース的コピュラ文である。なぜなら、共有知識領域に登録された役割「この船の船長」と、発話状況領域に存在する「あの人」とを間スペース的コネクタで結合しているからである。この場合には、「太郎はあの人だ」のように、A に常に固定指示的ではなく、固有名が来ることもできる。従って、間スペース的コピュラ文「A は B だ」の主語 A は、指示的名詞句でも非指示的名詞句でもよく、「指示的 / 非指示的」という区別にたいして中立的である。

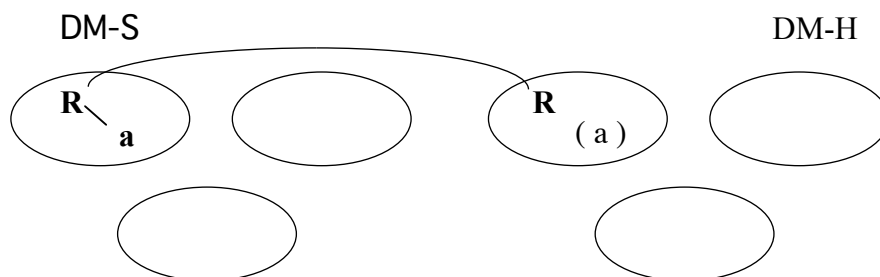
さて、次に次例をもとにしてライブニッツの法則にまつわるパラドックスを検討しよう。

(108) A: エリザベス・テラーの 6 番目の夫は誰ですか。

B: エリザベス・テラーの 6 番目の夫は、リチャード・バートンだ。

発話前の談話モデル構成は、次のようになる。R は「エリザベス・テラーの 6 番目の夫」に当たる役割的 discourse referent、a は「リチャード・バートン」という個体レベルの

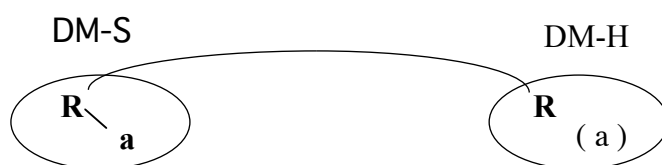
discourse referent である。指定文の話し手 B の DM-S においては、R と a とは役割・値コネクタで結合されている。DM-H の共有知識領域には、「リチャード・バートン」に当たる a はあってもなくても議論に関係ないので、(a) とカッコに入れて表示してある。



さて、指定文「エリザベス・テーラーの 6 番目の夫は、リチャード・バートンだ」において、「エリザベス・テーラーの 6 番目の夫」と「リチャード・バートン」は同一指示なので、ライブニッツの法則を適用して置き換えると、「リチャード・バートンは、リチャード・バートンだ」という同語反復になり、情報価値のない文になってしまうのは、次の理由による。「エリザベス・テーラーの 6 番目の夫」を「リチャード・バートン」で置き換えるということは、上の図で R を a で置き換えることを意味する。すると結果は、「a は a だ」となり同語反復になるのは当然である。

指定文「エリザベス・テーラーの 6 番目の夫は、リチャード・バートンだ」の情報価値は、話し手の DM-S においてはゼロである。話し手はすでにそのことを知っているからである。この指定文の情報価値は、聞き手側の DM-H においてしか意味を持たない。この指定文は、DM-H において役割としてしか存在していない R に、値 a を充当せよという指令である。DM-H においては R と a とは結合されていないのだから、「エリザベス・テーラーの 6 番目の夫」と「リチャード・バートン」の同一指示はまだ成立していない。だから、DM-H においてライブニッツの法則を適用することはできない。

上の図から共有知識領域だけを取り出すと、次のようになる



DM-S は話し手の「信念スペース」に、DM-H は聞き手の「信念スペース」に相当する。問題の指定文はこのふたつの信念スペース内の要素を結合する「間スペース的コピュラ文」である。だから、仮説 2 で述べたように、この指定文は不透明な文脈を形成するのである。

このとき、DM-S において「エリザベス・テーラーの 6 番目の夫」は役割と値を持つので「指示的」と言ってよいだろう。ところが、同じ名詞句は DM-H では役割解釈しか持たな

い。問題の指定文が有効に働き情報価値を持つためには、「エリザベス・テーラーの6番目の夫」は DM-S ではなく DM-H において解釈されなくてはならない。

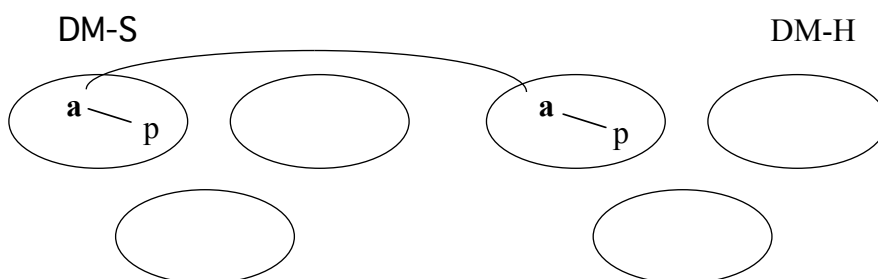
### 3.3. 措定文

次に措定文が談話モデルでどのように表示されるか見ておこう。次の B は措定文であり、指示対象が確立されている「兄」について、「数学教師」という属性を述べている。

(109) A: あなたのお兄さんのご職業はなんですか。

B: 兄は数学教師です。

措定文は便宜的に次のように表示しておこう 45)。



a は話し手 B の兄を表わす discourse referent である。p は「数学教師」という属性を表わす。p は属性であり、discourse referent ではない。したがって a と p を結ぶ線は ID コネクタでも役割・値コネクタでもなく、discourse referent に属性を付与するものとしておく。a は DM-S にも DM-H にもあらかじめ存在しているので、属性 p は a の指示対象の確立になんら寄与しない。A も B も前から知っている人について、「数学教師」という属性を付加するだけである。

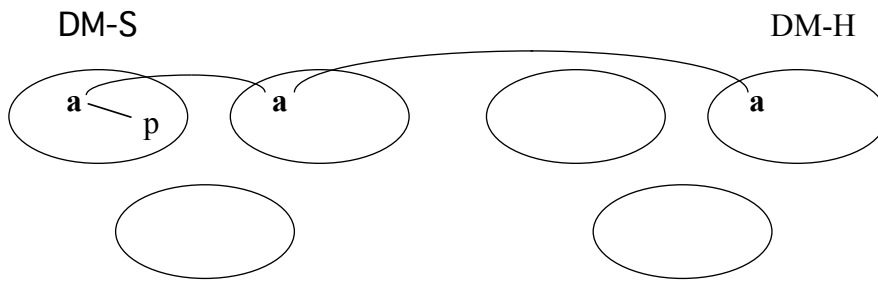
このように措定文の場合、複数のスペースをまたいで discourse referent 同士を結合する ID コネクタはない。このため措定文は常に単一スペース内で解釈され、間スペース的コピュラ文ではない。

### 3.4. 同定文

次は同定文である。同定文は次のように表示される。

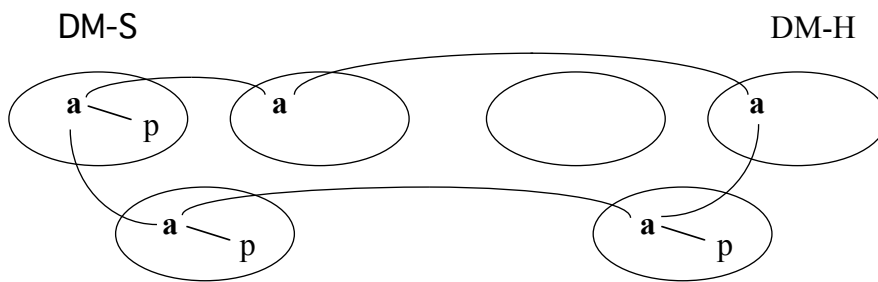
(110) A: あの人は誰ですか。

B: あの人は私の息子のピアノの先生です。

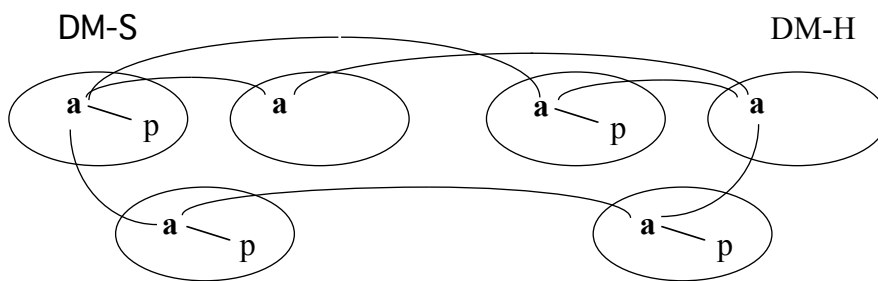


上に示した発話前の談話モデル状態で、a は「あの人」に相当する discourse referent である。この指示対象は発話現場にいる人なので、DM-S と DM-H の両方の発話状況領域に存在する。両者は ID コネクタで結合されている。p は「私の息子のピアノの先生」という属性を表わす 46)。DM-S の共有知識領域では、a には p の属性が付与されている。措定文の場合と異なり、DM-H の共有知識領域には a が登録されていないことに注意されたい。

この始発状態から次のステップを経て談話モデルはアップデートされる。まず、同定文「あの人は私の息子のピアノの先生です」を発話することにより、a と p とその関係は DM-S の言語文脈領域にコピーされ、次いで DM-H の言語文脈領域にもコピーされる 47)。



DM-H の言語文脈領域にコピーされた a は、発話状況領域にあらかじめ存在する a と同一なので、両者は ID コネクタで結合される。さて、ここまでの処理で聞き手は、発話状況領域に存在する a に p を付与せよという指令を受けたことになる。この作業は共有知識領域で行なわれるので、DM-H の発話状況領域にある a は共有知識領域にコピーされ、そこで p を付与され、次の状態に至って発話の理解は完了する。



坂原はここで問題にしている同定文を独立のタイプとはせず、記述文 (=措定文) を「属性付加の記述文」と「属性同定の記述文」のふたつに分けて、ここでいう同定文は「属性同

定の記述文」だとした。

しかし措定文(=坂原の「属性付加の記述文」と同定文(=坂原の「属性同定の記述文」)は、談話モデルでは上に示したように異なるものとして表現される。大きな違いは、措定文は「あなたも私も知っている人・物について、追加的な属性を付与する」働きを持つ文なので、「A は B だ」の A に当たる指示対象は、DM-S にも DM-H にもあらかじめ登録されている。これにたいして、同定文の場合は上に見たように、「あの人」の指示対象は DM-H では発話状況領域に存在するだけで、共有知識領域には登録されていない。これは聞き手にとって「あの人」は直的に認識できる指示対象としてのみ捉えられており、共有知識領域の構成する知識ベースに登録される資格をまだ満たしていないためである。正体が未知のものは知識として登録できないのである。坂原のいう「属性同定」とは、目の前にいる正体のわからない人を、「話し手の息子のピアノの先生」という属性を持つものとして共有知識領域に登録せよ、という指令であり、単なる措定文の属性付与とは異なる操作として区別されなくてはならない。

このことは、少し異なる次のタイプの同定文ではより一層はっきりする。

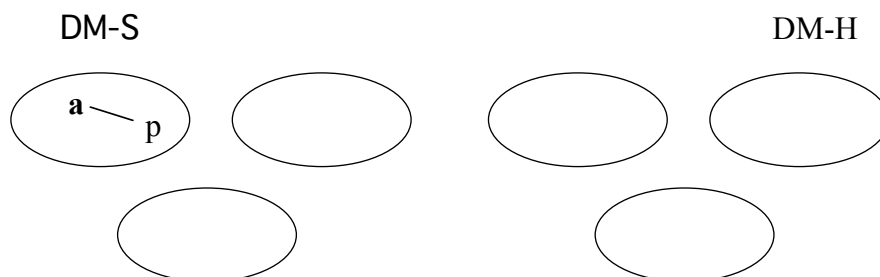
(111) A1: 犯人は誰なんだい。

B1: 犯人は山田太郎だよ。

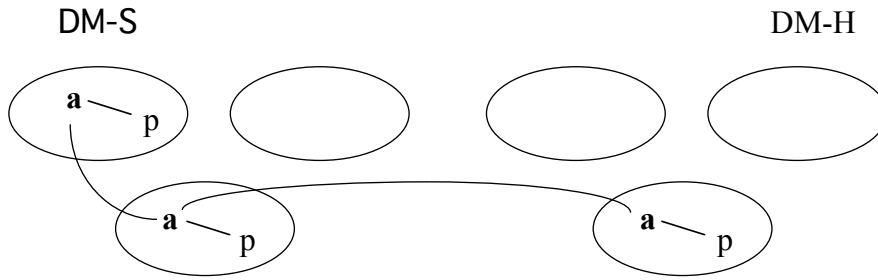
A2: 山田太郎って誰？

B2: 山田太郎というのは、被害者の姉の夫だよ。

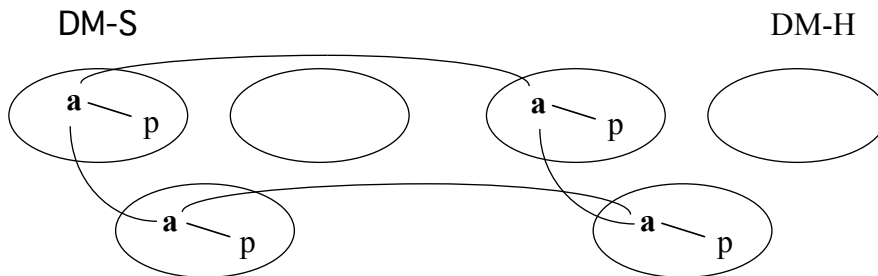
ここで問題にする同定文は、B2 の発話である。B1 の指定文で与えられた「山田太郎」について A は心当たりがないので、A2 で同定を求めている。B2 の同定文の発話時以前の談話モデル状態は次のようになる。a は「山田太郎」に当たる discourse referent、p は「被害者の姉の夫」という属性を表わす(48)。山田太郎という人を知っていて、それが被害者の姉の夫であるということを知っているのは、話し手 B のみなので、これらは DM-S の共有知識領域にしか存在しない。



同定文「山田太郎というのは、被害者の姉の夫だよ」の発話により、話し手は a と p とその関係を DM-S の言語文脈領域にコピーし、それは DM-H の言語文脈領域にもコピーされる。それが次の状態である。



次に聞き手 A は DM-H の言語文脈領域に書き込まれた a と p とその関係を、共有知識領域に転送する。この転送操作は、新規情報の咀嚼と学習というステップに相当する。こうして次の最終段階に達して、同定文の処理は完了する。



これで聞き手 A は、それまで知らなかった「山田太郎」という人の存在と、「被害者の姉の夫」に当たるという属性を、自分の知識ベースに登録したことになる。

西山が同定文「B が A だ」の B、つまり倒置同定文「A は B だ」の B について、それが「指示的名詞句」だと述べていることは、先に見たとおりである。もう一度引用しておく。

同定文「B が A だ」のように、B が「が」をとることができることから明らかなように、B は指示的名詞句である。( ... ) (倒置) 同定文の B は、世界のなかの一次的な個体 (人間や家、物) を直接指示しているのではない。そうではなくて、B は、A を同定するための特徴記述を満たすものを指示するのである。B の記述内容が決定的であるのはそのためである。(中略) その意味で、(倒置) 同定文の B は、同一対象を指示する別の表現で置き換えることのできない特殊な種類の指示表現であると言わざるを得ない」(西山 2003 : 170)

この引用のなかで、「B の記述内容が決定的である」という点は正しい指摘である。次の例を比較してみよう。何台も車が停めてある駐車場で、「あなたの車はどれですか」と訊かれたとする。私の車は、右から三番目に停めてあり、駐車場に一台だけあるブルーのコンバーティブルで、停めてある車の中で一番汚れているとする。この質問に答えるのは指定文になるが、指定文の場合には次のどれでもよい。

- (112) a. 私の車は、右から三番目のです。  
b. 私の車は、ブルーのコンバーティブルです。  
c. 私の車は、一番汚れているやつです。

このように、指定文では値を一義的に決めることさえできれば、「A は B だ」の B の記述内容は何でもかまわない。

しかし、同定文では事情が異なる。次の例を考えてみよう。私が帰宅すると、客間に見知らぬ青年が座って紅茶を飲んでいる。私は母に「あの人誰？」と同定を求める質問をする。その青年は、私の妹・美奈子の新しいピアノの先生であり、東京芸大のピアノ科を主席で卒業した人であり、女優高階真由子の恋人と噂のある人だとする。母が私の「あの人誰？」という質問に、次の同定文で答えた場合、どれでもよいという訳にはいかない。

- (113) a. あ的那个人は、美奈子の新しいピアノの先生よ。  
b. あ的那个人は、東京芸大のピアノ科を主席で卒業した人よ。 c. あ的那个人は、高階真由子の恋人と噂のある人よ。

私の「あの人誰？」という質問に一番ふさわしい同定文は a. だろう。「美奈子の新しいピアノの先生」と「東京芸大のピアノ科を主席で卒業した人」と「高階真由子の恋人と噂のある人」という三つの記述は、その青年に等しく適用される属性である。しかし、b. と c. は、私の質問に的確に答えているとは言い難い。これは、「美奈子の新しいピアノの先生」という記述だけが、聞き手と関係のある「美奈子」という人物を anchor とする関数的存在であり、上の談話が展開する状況との関連性を持っているからである。このように、同定文「A は B だ」の B の記述は、談話との関連性を強く要求される。

しかし、同定文「A は B だ」の B が「世界のなかの一次的個体を指示しない指示的名詞句である」という西山の主張は認めることができない。そもそも Declerck の *descriptively identifying sentence* とは、指示対象は確立されているが正体のわからない人・物について、その名前や属性を提供することで同定を促進する文であり、「A is B」の B は非指示的だとしている。

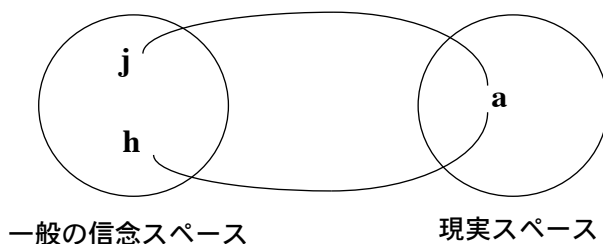
### 3.5. 同一性文

同一性文は談話モデルでは次のように扱われる。

- (114) a. ジキルはハイドだ。  
b. スーパーマンはクラーク・ケントだ。



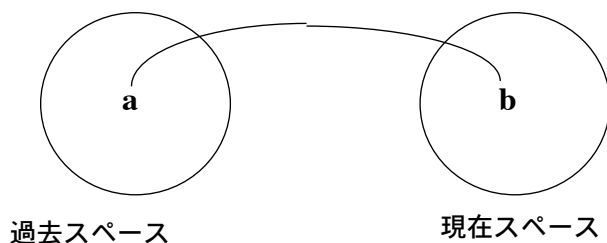
このような同一性文は、人格者のジキル博士と悪人のハイド氏は、一般に信じられているように別人なのではなく、実は同一人物だという意味を表わす。だから同一性文の解釈には信念スペースが関係している。次はメンタル・スペース理論における表示である。



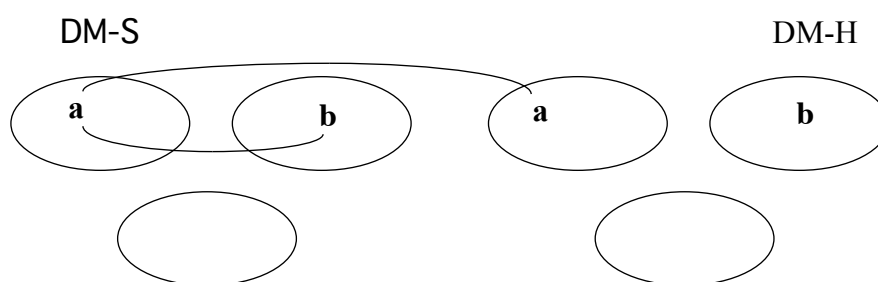
j は一般の信念スペースにおけるジキル博士、h はハイド氏であり、a は現実スペースにおいてその両者に対応する人物である。ただし、「ジキルはハイドだ」という同一性文を誤解のもとに発していて、実は二人は別人だという状況ならば、「現実スペース」はその発話者の「信念スペース」にすぎなくなる。上の図は談話モデルの共有知識領域に埋め込まれるのだが、図が複雑になるので詳細は略す。

次も同一性文である。私は戦争直後、孤児となり闇市を彷徨っていた。そんな時親切にしてくれた元航空兵がいた。私はその人と 50 年後に再会する。相手は私があ那时的子供だとは気づいていないという状況での発話である。

(115) 私はあ那时的の腹をすかしていた子供です。



これはメンタル・スペース理論でよく行なわれている表示なのだが、もう少し考えてみよう。「過去スペース」というのはどこにあるのだろうか。過去は過ぎ去った時間であり、もう存在しない。存在するのは私たちの記憶だけである。だから過去は記憶にすぎない。つまり、「過去スペース」は共有知識領域の一部をなす「エピソード記憶領域」に登録されている。だから上のメンタル・スペース風の図式は、談話モデルでは次のようになる。



DM-S は元孤児の私、DM-H は元航空兵の談話モデルである。DM-S の a は、私の共有知識領域のなかのエピソード記憶領域に登録されている「闇市を彷徨っていた過去の私」であり、発話状況領域の b は話し手の「私」である。両者は同一なので ID コネクタでリンクされている。一方、元航空兵の DM-H では、a 「闇市を彷徨っていたあの時の子供」と b 「現在のあなた」はあるが、元航空兵は同一人物だと気づいていないので、a と b はリンクされていない。問題の同一性文は、この a と b を ID コネクタでリンクせよという指令として働く。

同定を求める質問にたいして、同定文ではなく同一性文で答えることがある。

(116) A: あそこにいる白髪の中年の人は誰ですか。

B: 何言ってるんだい。あれは小学校のクラスメートの山田だよ。

A: えーっ。ずいぶん老けているのでわからなかったよ。

A は知らない人だと思い同定を求める質問をしたが、実はその人物は自分の知っている人だった。下線の同一性文の図式は上の元孤児の例の図式と同じであり、目の前の人物と過去の記憶にある山田を ID コネクタでリンクせよというものである。

#### 4. おわりに

本稿では西山のメンタル・スペース批判の妥当性を再検討し、そのなかに含まれた問題点が、談話モデル理論を用いてどのように解決されるかを見てきた。

一番の問題点は、コピュラ文の分析にあたって、西山の主張するように意味論と語用論を峻別することが果たして妥当かどうかという点である。西山はある名詞句が指示的か非指示的かは名詞句のレベルで決まるものではなく、それが「A は B だ」というコピュラ文に置かれたときに初めて決まると述べているが、これはまったく正しい指摘である。しかしながら、名詞句が指示的か非指示的かは意味論のレベルの区別であり、語用論における区別ではないとも主張しているが、本稿はこれとは異なる立場を採った。メンタル・スペース理論はもともと意味論と語用論を区別しない理論であり、メンタル・スペース理論に大きなヒントを得た談話モデル理論も同じ立場を採っている。

メンタル・スペース理論と談話モデル理論に共通する仮説は次のようなものである。

## 仮説

名詞句は適切なスペースにおいて解釈されなくてはならない。

ひとつ例を挙げておこう。

(117) a. Je n'ai pas reconnu dans cette vieille femme la jeune fille aux cheveux courts.

"I didn't recognize in this old lady the young girl with short hair."

「私はこの老婦人のなかに、ショートヘヤーの若い娘を認めることができなかつた」 = 「私はこの老婦人を見ても、それがかつてのあのショートヘヤーの若い娘だとはわからなかつた」

b. Je me tuerai plutôt que d'épouser un tel mari. (Molière, Avare)

"I will kill myself rather than getting married with such a husband."

「私はこんな夫と結婚するくらいなら死んだほうがましです」

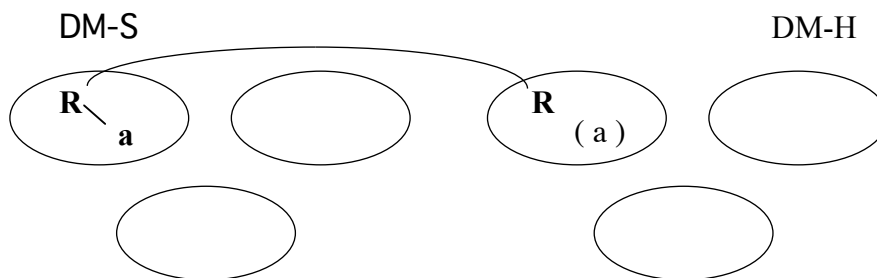
a. の「この老婦人」は現在スペースにおいて、「あのショートヘヤーの若い娘」は過去スペースにおいて解釈される。談話モデル理論的に言えば、「この老婦人」は発話状況領域において、「あのショートヘヤーの若い娘」は共有知識領域のなかのエピソード記憶領域に登録されていて、両者は ID コネクタでリンクされていることになる。

b. は修辞学で *metalepsis* 「転喩」と呼ばれているものである。「こんな夫」は目の前にいる男の記述として本来は不適切である。私はまだその男と結婚していないので、男は夫ではないからである。つまり *un tel mari* 「こんな夫」は「もし結婚したら」という状況を先取りした表現であり、現在スペースではなく未来スペースか、もしくは反事実仮想スペースにおいて解釈されなくてはならない。

この「名詞句は適切なスペースにおいて解釈されなくてはならない」という仮説は、西山がメンタル・スペースを批判するのに用いた次の例において、特に重要な意味を持つ。

(118) A: エリザベス・テラーの 6 番目の夫は誰ですか。

B: エリザベス・テラーの 6 番目の夫は、リチャード・バートンだ。



R = 「エリザベス・テラーの 6 番目の夫」は、DM-H では値 a = 「リチャード・バートン」を持ち「指示的」である。しかし、指定文 (118) B は DM-S ではなく、DM-H において解釈されなくてはならない。DM-H では R = 「エリザベス・テラーの 6 番目の夫」は、値を持たない役割名詞句である。だから指定文 (118) B は、DM-H においては情報価値のある有意な文として働くのである。

このように考えることは、「指示」という概念をスペースに相対化することを意味する。このことのもたらす帰結は指示理論にとって重大であるが、それについてはまた稿を改めて論じたい (49)。

本稿が立脚する談話モデル理論は、メンタル・スペース理論に多くを負っているが、いちばん大きなちがいは話し手のモデルと聞き手のモデルを立てて、言語をふたつのモデルの間の相互行為として把握している点にある。このようなモデルの有効性は、本稿で扱ったコピュラ文が最もよく示すところである。

コピュラ文のようなタイプの発話は、話し手からも聞き手からも中立ですべてを知っている「神の視点」に立脚する言語学ではうまく扱うことができない。談話モデル理論は「神の視点」を採らず、話し手の視点と聞き手の視点に相対化された言語活動を扱う。「談話」とは、一般にそのような性質のものなのである。

#### 【注】

- 1) 「\*学生が太郎だ」にふつう自然な解釈を与えることは難しいが、状況次第では不可能ではない。たとえば、ゲームの役割として「社長」「国会議員」「学生」が設定されていて、サイコロを振って役割を割り当てるという状況では、「社長が僕で、学生が太郎だ」は自然な文である。これは後述する「指定文」に相当する。
- 2) コピュラ文の主語代名詞については列挙できないくらいの文献がある。詳しくは Declerck, R. “‘It is Mr Y’ or ‘He is Mr Y’?”, *Lingua* 59, 1983.を見よ。フランス語に関する研究としては、東郷雄二「Mon frère, il est linguiste et le coupable, c’est lui – 代名詞 IL と CE の用法について」『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会) 53 号、1988 を参照のこと。
- 3) Declerck, R. “‘It is Mr Y’ or ‘He is Mr Y’?”, *Lingua* 59, 1983.
- 4) Declerck, R. *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-clefts*, Leuven University Press, 1988.
- 5) 西山佑司『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房、2003.
- 6) Ruwet, N. “Les phrases copulatives”, *Grammaire des insultes et autres études*, Seuil, 1982.
- 7) 逆行代名詞化に関してなぜこのような制約が存在するのかという問題について、ここで詳しく論じる余裕も準備もないが、以下に考え得る方向を示しておこう。記述文 *Ses yeux verts sont les seuls avantages de Christine*.において、代名詞 *ses* は指示的名詞句内にあり、先行詞 *Christine* は非指示的名詞句内にある。一方、指定文 *\*Ses seuls avantages sont les yeux verts de Christine*. では逆で、代名詞 *ses* は非指示的名詞句内にあり、先行詞 *Christine* は指示的名詞

句内にある。ここから次の仮説を導くことができる。

### 仮説

逆行代名詞化においては、代名詞は指示的名詞句内に、先行詞は非指示的名詞句内になくなくてはならない。

なぜこのような制約が存在するのかについては、次のように考えられる。逆行代名詞化では先行詞よりも代名詞が先に処理されなくてはならない。これは聞き手にとって大きな認知的負担である。一方、指示的名詞句は外延世界を指示するため、それ自身において処理が完結する。ところが非指示的名詞句は、指定文においては B の表す値が付与されて初めてその処理が完結する。だから非指示的名詞句の処理は指示的名詞句の処理よりコストが高く、認知的負荷が大きいと考えることができる。このため、すでに負荷が大きい逆行代名詞化において、さらに負荷のかかる処理となる名詞句の分布は避けなくてはならない。

8) ただし、若者を中心とする話し言葉では「花子って背が高い」「これっておいしい」のように、記述文での用例が観察される。メタ形式については藤村逸子「わからないコトバ、わからないモノ — 「って」の用法をめぐって」、『名古屋大学言語文化学部言語文化論集』XIV-2 1993 を参照のこと。ただし筆者は藤村の観察と分析に全面的に賛成するわけではない。

9) 本文でも述べたように、「ジキルというのはハイドのことだ」とすれば容認できる文になるが、これはもはや同一性文ではなく記述的同定文である。それは記述的同定文である「山田というのは昨日私の試験でカンニングした学生だ」が、「山田というのは昨日私の試験でカンニングした学生のことだ」と言い換え可能であることからわかる。

10) 西山佑司『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房、2003.

11) Heim, I., *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*, University of Massachusetts, 1982.

12) 東郷雄二「フランス語の不定名詞句と総称解釈」、『京都大学総合人間学部紀要』9 巻、2002.

13) 容認度の判定は西山による。

14) 倒置指定文という用語は上林洋二「指定と措定 — ハとガの一面」(筑波大学修士論文) 1984 によるとされている。これは「幹事は私だ」よりも「私が幹事だ」を基本形とする考え方である。本稿ではこの考え方にコミットするものではないが、用語の混乱を避けるために西山にならって同じ用語を用いる。

15) [ ] 内の例文は東郷が追加した。

16) Fraurud, K. “Cognitive ontology and NP form”, T. Fretheim & J. K. Gundel (eds) *Reference and Referent Accessibility*, J. Benjamins, 1996.

Fraudud は事物の存在論的あり方として 3 種類を区別している。individual 「個体」は他の存在に依存することなく存在できるものであり、その典型は「山田さん」「アメリカ合衆国」のような固有名である。2 番目の functionals 「関数的存在」は anchor と呼ばれる他の存在との関係において規定される。「私の妻」「この車のワイパー」「この国の首相」などで、関係名詞 relational nouns と呼ばれることもある。3 番目は instances 「クラスの一員」であり、クラス

の成員の一例としての存在である。

17) ただし、信念の文脈のような不透明な文脈においては、ライプニッツの法則は部分的にしか成立しない。

i) オイディプスはイヨカステと結婚したいと思っている。

ii) オイディプスは自分の母と結婚したいと思っている。

「イヨカステ」と「自分の母」の指示対象は同じなので、このふたつの命題は、すべての事情を知っている読者や神の視点から見ればその真偽値は同じであるが、オイディプスの視点から見れば同じではない。このように不透明な文脈では、真偽値は視点に相対的である。

Fauconnier のメンタル・スペース理論はこのようにライプニッツの法則が成り立たない状況を、不透明な文脈を拡大適用することで理論化しようとしたものである。

18) 砂川有里子「日本語コピュラ文の分類と問題点」第 10 回中部日本・日本学研究会発表ハンドアウト

19) 天野みどり「『が』による倒置指定文 — 『特におすすめなのがこれです』という文について」、『新潟大学人文科学研究』88、1995.

20) 砂川有里子「日本語コピュラ文の類型と機能 — 記述文と同定文」、『言語探求の領域 小泉保博士古希記念論文集』、大学書林、1996.

21) 砂川有里子「文の構造と談話機能 — 日本語コピュラ文分析」、『東アジア言語文化の総合的研究』（筑波大学学内プロジェクト）、2000.

22) 新屋映子「意味構造から見た平叙文分類の試み」、『東京外国語大学日本語学科年報』15、1994.

23) 坂原茂「記述文・同定文とフランス語のコピュラ文」、『フランス語学研究』24、1990.

24) 坂原の例文はすべてフランス語なので、ここではわかりやすいように例文を日本語のものに置き換えてある。このようにしても現著者の意図は損なわれない。

25) 坂原茂「役割、ガ、ハ、ウナギ文」、『認知科学の発展』3 巻、講談社.

26) 井元秀剛「役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み」、『言語文化研究』（大阪大学）21、1995.

27) 坂原茂「役割、ガ、ハ、ウナギ文」、『認知科学の発展』3 巻、講談社. なお例文 a は原文では (59)、例文 b は (60a)である。

28) 西山佑司『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房、2003、pp. 151-2.

29) 西山佑司『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房、2003、pp. 152-3.

30) 西山佑司『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房、2003、pp. 154-7.

31) 西山佑司『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房、2003、pp. 158-9.

32) 西山佑司『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房、2003、pp. 75-6.

33) 西山佑司「二つのタイプの指定文」、山田進他編『日本語 意味と文法の風景』、ひつじ書房、2000.

34) 西山佑司「二つのタイプの指定文」、山田進他編『日本語 意味と文法の風景』、ひつじ書房、2000、p. 42.

- 35) すでに見たように「こちらは山田さんです」のような紹介文では、述語位置の固有名「山田さん」は非指示的に働くので例外的である。
- 36) 西山佑司『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房、2003、p. 61.
- 37) 西山佑司「役割関数と変項名詞句 — コピュラ文の分析をめぐって」、『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』24、1992.
- 38) これにたいして、「真偽値が同じ」かどうかを問うており、「意味が同じ」かどうかは保証の限りではないという意見があるかもしれない。しかし本稿で問題にしているのは同じ意味かどうかという点なのである。
- 39) このような同語反復にも、複数スペースの介在する意味や、「しょせん子供は子供だ」のようなレトリック的な意味が生じるが、ここでは問題にしない。
- 40) 後に述べるように、コピュラ文のなかで単一スペースで成立するのは「措定文」だけである。残りの「指定文」「同定文」「同一性文」は、複数のスペース間のマッピング操作を装幀する必要がある。
- 41) 談話モデル理論の詳細については次の文献を参照されたい。  
東郷雄二「談話モデルと指示」『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』(科学研究費成果報告書 研究代表者東郷雄二)、pp.34-57、1998.  
東郷雄二「談話モデルと指示 - 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」、『京都大学総合人間学部紀要』第6巻、pp.35-46、1999;  
東郷雄二「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」、『京都大学総合人間学部紀要』第7巻、pp.27-46、2000.  
東郷雄二「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」、『フランス語学研究』35号(日本フランス語学会)、pp.1-15、2001.  
東郷雄二「定名詞句の『現場指示的用法』について」、『京都大学総合人間学部紀要』第8巻、pp.1-17、2001.  
東郷雄二「不定名詞句の指示と談話モデル」、『談話処理における照応過程の研究』(科学研究費成果報告書 研究代表者東郷雄二)、pp.1-35、2002.
- 42) ただし、**I bought a candle yesterday, but the wick had been broken off.** のような連想照応については、認知フレームを用いた別な原則を立てる必要があるが、ここでは詳述しない。
- 43) 実際にはもう少し複雑で、役割は「船長」だけであり、その役割が「この船」というパラメータをとって出来上がったのが「この船の船長」である。本文の図式では簡略化して「この船の船長」全体を値にたいする役割として図示している。なお、この意味において「この船の船長」は、西山がパラメータがすべて固定されているので指示的だとした「エリザベス・テラーの6番目の夫」と同じであることを注意されたい。
- 44) 発話状況領域にはもちろん聞き手であるAも登録されているが、図を簡略にするために省略してある。
- 45) 本当はaはDM-Sの言語文脈領域を経由してDM-Hの言語文脈領域にコピーされるなどの操作があるが、煩雑になるのでここでは結果のみ示した。

46) 「私の息子のピアノの先生」の構造はより複雑で、「私」を anchor1、「息子」を anchor2 として働く「関数的存在」functionals である「先生」からなるが、図が煩雑になるので属性として表示する。

47) p は属性であり、discourse referent ではないので、p 同士はコネクタで結合されない。

48) 「被害者の姉の夫」は、anchor1「被害者」、anchor 2「姉」を持つ「夫」という関数的存在 functionals であり、内部構造はもっと複雑だが、ここでは簡略化してひとつの属性とする

49) 指示の相対化の試みとしては、「意味論的指示」と「話し手の指示」を分離しようとした次の研究がある。

Kripke, S. “Speaker’s reference and semantic reference”, *Midwest Studies in Philosophy* 2, 1977.

Kripke のアイデアは談話モデル理論で表現することが可能である。



